



# 広報

京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻  
京都大学医学部人間健康科学科

## 新医療人の育成

京都大学大学院医学研究科高度医療専門職大学院シンポジウム  
人間健康科学系専攻の未来像を語る  
2018年2月2日[金] 14:00-18:00  
京都大学百周年時計台記念館百周年記念ホール

参加費 無料  
定員 500名

- 開会の挨拶 山根 壽一 / 京都大学総長  
澤本 博司 / 文部科学省高等教育局長(予定)  
上本 伸二 / 京都大学大学院医学研究科 人間健康科学系専攻長
- 第一部  
「人間健康科学科の組織改革について」  
足立 壯一 / 京都大学大学院医学研究科 人間健康科学系専攻長  
「高等教育における医療人養成について(座談)」  
澤本 博司 / 文部科学省高等教育局長(予定)  
「人間健康科学系専攻への期待:医学研究を支援する立場から」  
高山 章 / 京都大学大学院医学研究科 人間健康科学系専攻長  
「22世紀の健康科学に想いを馳せて:健康を科学するための学際的コミュニケーションを考える」  
余 貴美 / ノースカロライナ州立大学ヘルスシステムズセンター 教授  
「医学物理士養成の現状と将来展望」  
白土 博昭 / 北海道大学大学院医学工学部 医学物理士育成支援 代表委員  
「臨床研究支援スタッフの育成」  
名井 陽 / 京都大学大学院医学研究科 臨床研究支援センター 専任教授
- 第二部  
「医療ビッグデータサイエンティスト養成の現状と将来展望」  
井元 清隆 / 東京大学大学院医学部 ヘルスシステムズセンター 教授  
「理学療法士・作業療法士を対象とする高度実践研究員養成プログラム  
〜がん専門リハビリテーション専門員養成の取り組みと今後の展望について〜」  
辻 哲也 / 慶應義塾大学附属国際総合センターリハビリテーション部門長(医学部) / リハビリテーション学専攻 准教授  
「長寿社会の由来と行方」  
山根 壽一 / 京都大学総長
- 閉会の挨拶 足立 壯一 / 京都大学大学院医学研究科 人間健康科学系専攻長
- 主催 澤本 博司 / 京都大学大学院医学研究科 人間健康科学系専攻長



新医療人の育成シンポジウムの様子 (P3 参照)

### 目次

○学科長メッセージ	足立 壯一… 2	リハビリテーション科学コース 准教授	梁 楠…15
○「新医療人の育成」シンポジウム	教授 澤本 伸克… 3	看護科学コース 助教	近藤 祥子…16
○2年次学士入学が30年度から始まりました。	教授 若村 智子… 4	看護科学コース 助教	須賀原教子…16
○学内施設整備について	教授 三谷 章… 5	看護科学コース 助教	山之内智子…17
施設管理委員会 委員長		検査技術科学コース 助教	松尾 英将…17
○退任等挨拶		リハビリテーション科学コース 助教	谷口 匡史…18
元看護科学コース 教授	菅沼 信彦… 6	看護科学コース 特定准教授	中津井雅彦…18
元看護科学コース 教授	鈴木真知子… 6	検査技術科学コース 特定准教授	下野 昌宣…19
元リハビリテーション科学コース 教授	二木 淑子… 7	医療情報AIシステム学講座 (産学共同) 特定准教授	玉田 嘉紀…20
元リハビリテーション科学コース 教授	坪山 直生… 8	看護科学コース 特定助教	寺山 慧…20
元看護科学コース 助教	小西 奈美… 8	看護科学コース 特定助教	長島 俊輔…21
元看護科学コース 助教	山口 琴美… 9	リハビリテーション科学コース 特定助教	太田 恵…21
元リハビリテーション科学コース 助教	松島 佳苗… 9	医療情報AIシステム学講座 (産学共同) 特定助教	内野詠一郎…22
元発達障害支援医学講座 特定准教授	佐藤 弥…10	○第30回健康科学市民公開講座開催報告……………23	
○新任等挨拶		○2017年度オープンキャンパス……………25	
リハビリテーション科学コース 教授	稲富 宏之…10	○人間健康科学系専攻から博士が15名誕生しました……………26	
看護科学コース 准教授	新福 洋子…11	○人間健康科学系専攻・人間健康科学科	
看護科学コース 准教授	ANAGNOSTOU, Despoina…12	平成30年度入学試験結果及び	
看護科学コース 准教授	宇都宮明美…12	平成29年度修了・卒業者数……………34	
看護科学コース 准教授	松岡 真里…13	○平成29年度卒業生の進路調査結果……………36	
検査技術科学コース 准教授	鎌田真由美…14	○人事異動……………37	
検査技術科学コース 准教授	中村 光宏…14	○日誌……………38	
リハビリテーション科学コース 准教授	Todd PATARY…15	○あとがき……………39	



## 学科長メッセージ

足立 壯一

人間健康科学科では、日本と世界の医療の将来を担う意欲を持った熱意ある学生の入学を歓迎しています。

人間健康科学科および、その大学院の人間健康科学系専攻では、京都大学医学部附属病院の高度先進医療を担い、看護師、保健師、助産師、臨床検査技師、理学療法士、作業療法士の指導的役割を果たす高度医療専門職の研究と教育を推進しています。

平成 25 年度の国立大学改革において、京都大学では、「世界トップレベルの先端医療技術の開発および臨床フィールドにおける実践の追求を通じ、世界レベルの研究を牽引する研究者の養成」とのミッションを掲げています。これは、人間健康科学科および人間健康科学系専攻における世界トップレベルの研究の推進と、研究者の養成を目指すものです。

上記ミッションの達成するため、一昨年度の入試から大改革を行いました。高度医療専門職や世界レベルの研究者の育成の素地を学部段階からつくり、大学院への進学率を向上させるため、平成 29 年度から学生定員を 100 名に変更し、現行の 4 専攻を「先端看護科学コース」、「総合医療科学コース」、「先端リハビリテーション科学コース」へ再編し、学部・大学院を通した一貫教育を実施します。改革後の入学定員 100 名のうち、一般入試による定員を 70 名とし、一括入試として精鋭化します。特色入試による入学定員は 30 名（看護 20 名、理学 5 名、作業 5 名）とし、明確な目的意識と熱意あふれる学生の受け入れを推進します。また、平成 30 年度からは、17 名（看護 12 名、リハビリテーション 5 名）の 2 年次学士入学も開始しました。

社会はグローバルのレベルでも、また日本の国内でも急速に変化しており、高齢化社会も含めて、さまざまな問題が生じています。科学技術の進歩は急速でダイナミックであり、それらに合わせて医療は急速に変化しています。そのような社会と医療の変化に対応して、独創的な新規医療の科学分野を開拓する研究と、研究者の養成が必要です。先端看護科学コースでは、高度実践研究者養成プログラムを、先端リハビリテーション科学コースでは、先進・融合リハビリテーション科学講座を新設し、修士・博士一貫教育を行うとともに、高度実践看護師、専門理学療法士、専門作業療法士を養成します。また、新たな研究領域として、先端看護科学コース、先端リハビリテーション科学コース、総合医療科学コースを融合するビッグデータ医科学講座を新設しました。ビッグデータ医科学は、ゲノム医療に基づく個別化医療と、そのために必要な早期診断手法の研究開発を強力に加速するために必須の領域です。この領域の研究開発や人材育成の取組は、我が国ではこれまで皆無に等しく、米国に大きく遅れをとっています。合的に精通した指導者によって、体系化したカリキュラムが検討されています。本学科から輩出される人材が、医療ビッグデータ解析や臨床ゲノム解析に基づく医療や研究開発プロジェクト、人材育成プロジェクトで活躍し、我が国のみならず世界をけん引していくことが期待されます。

以上のことから、人間健康科学科では、グローバルな医療の変化と進歩に対応できる高度医療専門職の養成を目指し、また、次代の世界の医療研究を担うリーダーとなる志を持った、多くの学生の入学を期待しています。

## 「新医療人の育成」シンポジウム

教授 澤本 伸克

近年、iPS細胞を始めとする全く新しい医療技術の開発や、少子高齢化による社会構造の変化など、医学・医療を取り巻く環境は大きく変化しています。この変化に対応するため、京都大学医学研究科人間健康科学系専攻は、これまで取り組んできた看護学・リハビリテーション学・先端医療技術開発の分野での独創的な学術研究とそれを担う人材育成に加えて、ビッグデータサイエンティスト・臨床研究管理者・医学物理士などの新分野開拓も目指した組織改革の真っ只中にあります。この改革をさらに推進するため、人間健康科学系専攻の今後のあり方を見据え、その未来像を語るシンポジウムを2018年2月2日京都大学百周年時計台記念館・百周年記念ホールで開催いたしました。

「人間健康科学系専攻の未来像を語る」と題したこのシンポジウムでは、京都大学 山極 壽一総長、上本 伸二医学研究科長から開会のご挨拶をいただきました。文部科学省高等教育局長の義本 博司様にもご挨拶とご講演をいただく予定でしたが、急なご公務のため、大臣官房審議官（高等教育局担当）の信濃 正範様が駆けつけて下さいました。

人間健康科学系専攻 足立 壯一専攻長から現在進行中の組織改革についてご説明させていただいた後、信濃 正範審議官より「高等教育における医療人養成について」、日本医療研究開発機構の菱山 豊理事より「人間健康科学系専攻への期待：医学研究を支援する立場から」と題し、我が国の医学・医療の教育と研究が進むべき方向について、示唆に富むご講演をいただきました。続いて、各分野の国内外のトップランナーの先生方から、看護学（ノースカロライナ大学チャペルヒル校 余 善愛教授）・リハビリテーション学（慶應義塾大学病院 辻 哲也部門長）の教育研究の取り組み、医療ビッグデータサイエンティスト（東京大学医科学研究所 井元 清哉教授）・臨床研究支援スタッフ（大阪大学医学部附属病院 未来医療センター 名井 陽センター長）・医学物理士（北海道大学教授 医学物理士認定機構 白土 博樹代表理事）の養成の現状と将来展望について、素晴らしいご講演をいただきました。最後に、山極 壽一総長から「長寿社会の由来と行方」と題して、有史以前からさかのぼって人間を探る霊長類学の視点から長寿社会を捉える貴重なご講演をいただきました。

当日は平日の午後2時からという時間的制約にもかかわらず、386名の参加者にお集まりいただきました。ご参加いただきました皆様に感謝申し上げます。また、企画や演者の招聘では、人間健康科学系専攻の多くの教職員の皆様にご尽力いただきました。今回のシンポジウム開催にあたりまして、山極総長はじめ事務本部の皆様、上本医学研究科長はじめ医学研究科執行部の先生方、医学研究科事務の皆様にもさまざまな場面でお力をいただきましたことを、深く御礼申し上げます。





## 2年次学士入学が30年度から始まりました。

教授 若村 智子

京都大学の理念に基づく「自由の学風」の下、本学科は、平成26年には看護学・医療技術分野で世界に誇る独自の学術研究の推進と、世界レベルの研究を牽引する研究者養成をミッションに定めました。その推進のために、平成29年に大きく学部の入試方式を変更しました。それに伴い、本学科に適する資質と能力を有する、本学部以外の大学を卒業した人や卒業見込みの人に対して、本学科の専門教育課程を3年間で履修できるプログラムを平成30年から開始しました。

このプログラムによって、その意欲と資質がある人に、医療職に関する知識や能力を身につけていただき、医療の世界で活躍していただきたいと思います。さらに、社会経験を積んだ人は、人の痛みにも深く共感できるでしょう。勉強意欲が高く、多様な文化・教育背景をもつ人が、移植医療や再生医療、がんや難病医療などの高度先進医療の一翼を担う研究の推進に加わることは、上記ミッションに基づく学問創成に関わる医療専門職の養成に携わる人材として、多くの活躍できるフィールドを見つけることができるでしょう。

本学科は、京都大学の他学部卒業者を含む、学士の学位を有する人に対して、出身学部や国籍の如何を問わず、多くの方に受験していただくことを期待しています。このプログラムは、4年制大学を卒業後、看護師（保健師選択）、理学療法士、作業療法士の資格取得をめざす方を対象とした入学制度です。

募集人員は、先端看護科学コース12名と、先端リハビリテーション科学コース（理学療法学講座・作業療法学講座）5名の計17名です。

在学中は、他の学部生とともに教育を受け、臨床実習を経て、京都大学卒業とともに該当の国家試験受験資格を得ることができます。修士・博士課程の大学院が設置されていますので、続けて進学することも可能です。助産師や専門看護師などの資格を得ることができます。詳細は、ホームページを参照ください。

(学士入試検討WG)



### 2年次学士入学（大卒者・見込者対象）募集

出願期間：平成30年7月10日～13日

試験日：平成30年8月24日

募集要項配付中

京都大学 医学部 人間健康科学科  
看護師・保健師・理学療法士・作業療法士 国試受験資格取得

試験科目：英語\*・小論文・面接

\* TOEFL、TOEICなど外部試験成績利用可。詳しくは募集要項をご覧ください。

〒606-8501  
京都市左京区吉田近衛町  
京都大学医学部教務課 人間健康科学科教務掛  
電話：075-753-9313/9314  
メールアドレス：hs-kyomu@office.med.kyoto-u.ac.jp  
HP：http://www.med.kyoto-u.ac.jp/hs\_gakushinyugaku/



## 学内施設整備について

施設管理委員会 委員長 教授 三谷 章

人間健康科学系専攻内においては、組織再編にともない新たに実習室、演習室、実験室が設置されました。1階には、南棟に約80名の学生が実習を行うことができる総合実習室（240平方メートル）が設置されました。2階には、西棟に4つの演習室（各23, 27, 27, 34平方メートル）が設置されました。そして、3, 4階には、人間健康科学系専攻の教職員であればどなたでも、教職員グループウェア「施設予約」にて予約をし、ご使用いただける5つの共通実験室が設置されました（下図）。共通実験室1は、374号室にあり、対面インタビューなどに適しています。共通実験室2は、373号室にあり、小グループを対象とした研究に適しています。共通実験室3は341号室にあり、隣室から保護者等が見守ることができます。共通実験室4, 5は、473号室にあり、外部からのノイズが入りにくい構造になっています。ご使用に際しては、最初に使用登録をさせていただくことになりますが、その後は教職員グループウェア「施設予約」にて予約をしてご使用いただけます。各教員の研究指導をうけている大学院生・学部生や研究員の方々もご使用いただけます。どうぞご活用下さい。

なお、今回の共通実験室の導入は、従来からこれらの室を使用されてこられた教員の方々のご理解とご協力のもとに実現しました。御礼申し上げます。



共通実験室1  
(A室：12 m<sup>2</sup>)  
(B室：12 m<sup>2</sup>)



共通実験室2  
(42 m<sup>2</sup>)  
(収納室 13 m<sup>2</sup>)

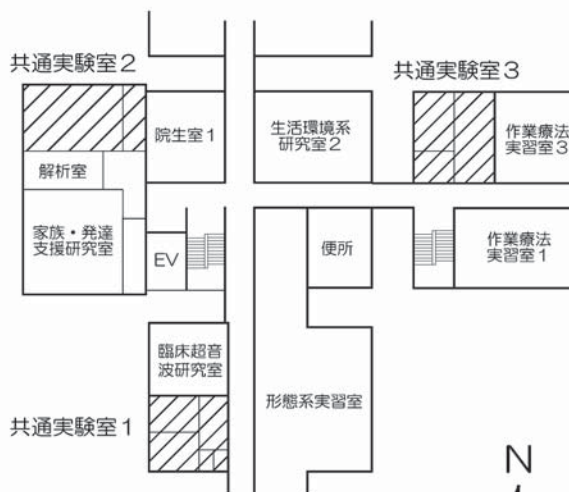


共通実験室3  
(A室：16 m<sup>2</sup>)  
(B室：25 m<sup>2</sup>)



共通実験室4, 5  
(各 13 m<sup>2</sup>)

3F



4F



斜線の入っている室が共通実験室



## 退職のご挨拶

元看護科学コース 教授 菅沼 信彦

平成 30 年 3 月末日をもちまして、人間健康科学系専攻教授を定年退職させていただきました。最終講義ならびに退職記念祝賀会には、足立専攻長をはじめ多くの皆様にご参加いただきありがとうございました。また、平成 17 年 11 月に保健学科に着任以来、本専攻の多くの方々に支えていただきましたことを、心から感謝申し上げます。

元々名古屋生まれの名古屋育ちで、名古屋市から住民票を移したこともなく、京都へは初めての異動となりました。前任地が地方都市の市民病院で、臨床漬けの日々の多忙な日々を送っており、久々にアカデミックな場所に戻ってきて、かつ看護学・助産学教育という新たな分野に足を踏み入れ、しかも医学部保健学科としての船出を始めた時期でもあったため、どのように対応すべきか最初は戸惑いの連続でした。医師の場合、医学部においても病院でもほとんどが縦社会の集団行動で、特に産婦人科のような外科系領域では多くのメンバーといっしょに仕事を進めていく形でした。まずは一人で何ができるのか… 最初の数ヶ月は、ある意味そんなことをゆっくりと考える時間ができました。以降、耐震改修に伴う施設工事、大学院の設置、助産過程の大学院への移行等、教育・研究というよりは事務的な業務が回ってきていました。

研究科としてその内容が充実する中、卒業研究のための学部 4 回生や修士・博士課程の学生たちと接する機会が増えてきました。私の研究室を選択した方々は看護や助産の本道を歩こうとする人は少なかったのかもしれませんが、強く感じたのは「さすがに京大生は優秀だ！」という印象でした。主催させていただいた第 28 回日本性科学会、第 52 回日本母性衛生学会においても、教員の先生方に加え、多くの学生さんにお手伝いをいただき成功裡に終えることができました。私の指導力不足のため、学問的に満足いただけるような十分なサポートはできませんでしたが、今でも多くの卒業生たちが訪ねてきてくれるのは嬉しい限りで、教員冥利に尽きます。また徐々に医師としての仕事、特に生殖医療に関しても、小西教授のお計らいにより京大産婦人科生殖グループとも一緒にさせていただいたり、子宮移植という新たな不妊治療の進展のため、慶應大学や東京大学の先生方とも一緒にできる機会をいただきました。このような皆様のおかげで定年までの 12 年 5 ヶ月間を楽しく過ごさせていただくことができました。

定年退職後は地元でノンビリ暮らしていく夢を描いておりましたが、粗大ゴミがゴロゴロしている生活は家庭環境としても相応しくなく、相変わらず看護・助産の世界に踏みとどまっています。さらに新任地は新規に設置された看護学部ですので、また本専攻と同じ道を歩いて行くお付き合いをしなければならないかもしれません。退職後の業務なので… 無理をせず生きていきたいと考えている今日この頃です。最後になりましたが、貴専攻のますますのご発展を祈念いたしております。また不定期ですが京大病院産婦人科外来・講義も担当する予定ですので、今後ともご指導、ご鞭撻の程、よろしく願い申し上げます。



## 退任のご挨拶

元看護科学コース 教授 鈴木 真知子

平成 30 年 3 月 31 日付けで人間健康科学系専攻看護科学コース育成看護学分野教授を定年退職し、平成 30 年 4 月 1 日よりビッグデータ医科学分野奥野研究室の客員研究員にいただき、四天王寺大学看護学部設置準備室に着任しています。



思い返せば、平成19年4月に助教との2名からなる人間健康科学部小児看護学分野教授に着任し、11年間、京都大学に所属させていただきました。着任当時は、短期大学部から学部昇格してすぐの頃で、耐震工事前の暗くて古い建物、ゴミ箱ひとつもない研究室でした。その後、耐震工事中の1年間は他の建物に仮住まいをしましたが、新しい建物に引っ越した後は、備品も整えられ、研究室としての環境が整いました。そして、学部完成年次後、修士課程から博士課程が開設されました。今から思えば正に激動期でした。

私の京大での11年間は、「地域支援活動から編み出された研究課題と教育」という文言に表されます。具体的には、近畿県内では、小児訪問看護がまだ保険適応として認められておらず、小児在宅が進んでいない状況でしたが、関係機関のご協力を得て、現在では全国的に小児訪問看護が医療保険の適応として認められるようになり、在宅への移行促進につながっています。脊髄性筋萎縮症家族の会の医療アドバイザーとしてご家族と共に国に交渉した呼吸ケアに必要なカフアシストも医療保険の適応として認められるようになり、在宅への移行後の肺炎による入院回数の激減につながりました。また重度障害児者のご家族、支援者を対象としたコミュニケーション支援に関する全国での研修会、特にひらがな学習をサポートするためのアプリ開発では、時計台で記者発表を行うという経験もさせていただきました。そのような中で、諸先生方のご指導、ご協力のお蔭で博士課程修了生4名を輩出することができました。これらの取り組みができたのも、先生方をはじめ、学生さんたちのお蔭だと心より感謝しております。そして、人間健康科学科の事務室の皆様には、多大なサポートを頂戴し、いつも温かいお声がけをしていただきました（現在も引き続き・・・）。本当にありがとうございました。

平成30年4月より、四天王寺大学看護学部設置準備室に所属すると共に、奥野研究室客員研究員として「目は口ほどにものをいう」という諺があるように、重度障がい児のアイトラッカーによるコミュニケーション支援法の開発に取り組んでいます。

これまでの自宅、滋賀県栗東市から京大までの通勤も大変でしたが、今は「はるか」通勤で2時間以上を要する通勤時間との戦いの日々を挑んでいます。新たな看護を創造すべく京大での経験を糧に、努力していきたいと思っておりますので、今後も引き続きご指導、ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、人間健康科学系専攻の益々の発展と、皆様のご健康、ご多幸を祈念しております。



## 退職にあたって

元リハビリテーション科学コース 教授 二木 淑子

平成30年3月末日をもちまして京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻教授を定年退職致しました。京都大学には平成18年10月に赴任し11年半を過ごさせて頂きました。在職中は優秀な多くの方々との刺激を受けながら教育・研究が行え、大変貴重な経験となりました。また約11年の間に、大学院の開設、耐震工事による引っ越し、数度の組織改編・組織改革があり、大変多くの縁の下の力持ち仕事を行ってきました。当初は思うように教育・研究がはかどらず思い悩むことも多かったのですが、数年目からはまずは捨て石となって新しい人間健康科学の人材育成をすることが自分の役割だと思えるようになりました。そうした中で、わずかではありますが京都大学における作業療法学の実験系研究、情報工学との学際的研究などの基礎的研究を行うことができました。優秀でまじめな京大の卒論学生・院生と出会えたからこそ、可能だったのだと思います。

国家資格として認められた医学的リハビリテーション専門職には、理学療法士、作業療法士、言語聴覚療法士の3つがあり、医療の中ではまだ新しい職種です。作業療法のセラピスト数は理学療法の約半数で、昔から医療なのか福祉系の専門職なのかわかりにくいといわれて来ました。しかし超高齢社会となって、悪くいえば何でも屋、よく言えば包括的アプローチが可能な作業療法士に対するニーズは非常に高くなっています。同じく包括的な看護学がその研究の発展に苦勞されてきたのと同様、作業療法学も苦勞しており、少し遅れて追いかけています。私は現在充電中で

すが、今後も好きな臨床や研究に携わり、作業療法・リハビリテーションの臨床研究のために少しでも貢献していきたいと考えています。最後になりましたが、お世話になりました作業療法学講座の先生方、リハビリテーション科学コースの先生方、人間健康科学系専攻の先生方および職員の方々に心より感謝申し上げます。また皆様の益々のご活躍とご発展を心よりお祈りいたします。



## 退職のご挨拶

元リハビリテーション科学コース 教授 坪山 直生

3月末でほぼ25年間勤務した京都大学を辞し、4月から佛教大学保健医療技術学部勤務しています。長い間大変に御世話になりました。どうもありがとうございました。

私は整形外科医ですが、2000年10月に医療技術短期大学部に着任して以降、リハビリテーション専門職の先生方や院生と一緒に仕事をしてきました。そして、皆さんの研究能力、問題意識に感心させられました。世界の先頭を切って超高齢社会を突き進む我が国にとって、「運動機能」「生活活動能力」「脳機能」などをモチーフとした研究の重要性は益々高まっていくと考えます。これからも自らの知識・技術への誇り、学問への誇り、そして目指すものへの誇りを持って、研究を続け成果を世に出して頂きたいと思えます。

科学には、「自分の思いや直観のための根拠を見つける場所」という一面があると思えます。研究の原動力は個人の知的好奇心・探究心ですが、一方で「他者からの視点」にも価値があります。自らの専門性をさらに特化させて社会の中での価値を高めるためにも、異分野の情報に耳を傾けて変化への対応を準備するためにも、「自らの中の他者」を養ってください。京都大学にはそのための環境が整っていると思えます。だからこそ、自分たちの研究を発展させるだけでなく、今まで同様素質のある若者を集めて、将来の世界・日本を牽引する therapist/scientist を養成して頂きたく存じます。

私ももう暫くの間、場所を変えてリハビリテーション専門職の育成に携わることになりました。引き続きご指導・ご鞭撻のほど、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

## 退職のご挨拶

元看護科学コース 助教 小西 奈美

平成29年8月31日をもちまして、京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻を退職いたしました。紙面をお借りしましてご挨拶申し上げます。

私は平成20年10月に精神看護学助教として着任させていただき8年10か月勤務させていただきました。年度途中で退職となり、天谷真奈美教授を始め、学生の皆さま、先生方、職員の方々には大変ご迷惑をおかけしこのような場をお借りすることに恐縮いたします。しかしながら、在職中には専門分野や職域に関わらず様々な場面においてご支援を賜れたことが大変有難く、お礼を申し上げる機会を頂けたことに心より感謝申し上げます。着任当初は、教員という立場に戸惑いながら実習指導をしており、看護師長や実習指導者の方々にも私自身がご指導を受け学ばせて頂きました。そのような中で、私の教育観も培われ、素晴らしい指導者の方々、先生方に出会えたことはとても有難く、たくさんの思い出が宝物になっております。看護学専攻の先生方、臨床看護学講座の先生方には、櫻庭教授の御退官時や、その後の精神看護学分野の状況にご配慮賜り多大なご支援を頂き、職員の方々にもいつも快くご対応し



ていただきお蔭様でなんとか過ごすことができました。また、学生皆さんそれぞれ、希望や悩みを抱えながら励んでおられ、時に議論することは楽しく、私自身も勉強になりました。

現在は、京都橘大学看護学部勤務させていただいております。新たな環境で、教職員のみならず多くの学生と関わり日々刺激を受けております。京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻で学ばせていただいたことを糧に、教育、研究、社会貢献に邁進していきたいと存じます。

長い間、ご支援、ご指導を賜りまして誠にありがとうございます。心より深くお礼申し上げます。

## 退任のご挨拶

元看護科学コース 助教 山口 琴美

平成 29 年 10 月末日をもちまして京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻助教を退職致しましたので、ご挨拶申し上げます。

平成 18 年 4 月より京都大学に着任し、11 年 7 か月在籍させていただきました。着任した年は、助産専攻科の最終年度であり、保健学科 1 期生はまだ 3 回生でした。その後在籍中に、助産師教育課程は学部教育から大学院教育へ、学科の名称は保健学科から人間健康科学科（看護学科は先端看護科学）へと変わりました。毎年毎年新しい業務を実施するようで、あっという間に過ぎた気が致します。私自身が受けた教育を振り返りながら、どのような教育、指導が学生に伝わるのかを熟考する日々でございました。特に助産師教育では、長期にわたる実習を過ごすため、卒業や修了していく晴れやかな姿を見ると、真摯に向き合い、精いっぱいのことのできたらどうかと立ち止まる機会にもなりました。このような中、学科内の先生方だけでなく多くの方々の御協力を得て、大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻にて博士号を取得させていただき、研究者として走り出すこともできました。在籍中はいたらぬ点もあったかと思いますが、京都大学という最先端でご活躍されている先生方から貴重なご指導・ご鞭撻をいただくことができ、大変感謝しております。また、臨床の方々にも多大なるご尽力いただき、学生指導だけではなく、私自身の学びにもつなげていただき、大変有難く感じております。

11 月からの岐阜大学医学部看護学科着任後は、新たな役割を楽しみながら過ごしております。これも京都大学での多様な経験があったからこそだと感じております。教育者そして研究者としてまだまだ未熟ではございますが、皆様方から得られました貴重な経験を充分生かせるよう、今後もより一層邁進してまいります。

末筆ながら、ご指導、ご鞭撻くださいました看護科学コースの先生方、人間健康科学系専攻の先生方ならびに職員の方々に深く感謝申し上げますとともに、皆様の益々のご活躍とご発展を祈念申し上げます。

## 退任のご挨拶

元リハビリテーション科学コース 助教 松島 佳苗

平成 30 年 3 月 31 日を持ちまして京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻を退職いたしました。修士・博士と大学院生の時期を含めると、約 10 年間京都大学では多くの方にお世話になり、様々なことを経験させて頂きました。誌上をお借りして関係各位に深くお礼を申し上げたいと思います。教員としての 5 年間は長いようで振り返ると短く、初めて大学の教壇に立ったのがつい先日のことの様です。在職中は、人間健康科学系専攻はもちろん、京都大学医学部附属病院、他専攻の先生方も含めて素晴らしい出会いにも恵まれました。私にとって、京都大学は様々な分野の先生方と意見を交えながら、新しいことに挑戦できる大変貴重な場であったと思っています。また、私は発達障害児に関する研究を主に行ってききましたが、お子さんやご家族の方々のご理解とご協力にも支えられて取り組む

ことができました。今後も感謝の気持ちを忘れずに、臨床の場に活かせる研究、そしてより良い臨床を目指し、着実に取り組んでいきたいと考えております。

科学研究費助成事業を含め、現在進行中の研究プロジェクトに関しては、客員研究員として取り組ませて頂いており、京都大学の先生方には引き続きお世話になることと思っておりますが、今後ともご指導ご鞭撻賜りますよう宜しくお願い申し上げます。



## 退任のご挨拶

元発達障害支援医学講座 特定准教授 佐藤 弥

平成 29 年 9 月末日をもちまして、京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻発達障害支援医学講座特定准教授を退職いたしましたので、ご挨拶申し上げます。

私は平成 26 年 10 月に赴任し、おかげさまで楽しい 3 年間で過ごさせていただきました。在職中には、多くの先生方にご支援いただきまして、しっかりと研究することができました。3 年の間に、筆頭著者として 17 本、共著者としての 12 本の英語論文を出版することができました。この間に、しばらく取り組んでいた幸福の神経基盤についての研究を発表することもできまして、世界 400 以上のメディアに取り上げられ海外雑誌の表紙を飾るなど、予想外の出来事を経験することもできました。本当に多くのことを学べた 3 年間となりました。

平成 29 年 10 月からは、京都大学こころの未来研究センターにて特定准教授として勤務をしております。研究者としてさらに成長するために鍛錬しております。今後とも、ご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、皆様のますますのご発展と、ご健康とご多幸をお祈り申し上げます。



## 就任のご挨拶

リハビリテーション科学コース 教授 稲富 宏之

2017 年 10 月 1 日付で、京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻リハビリテーション科学コース作業療法学講座の教授として就任いたしました。この紙面をお借りいたしまして皆様に謹んでご挨拶を申し上げます。

私が作業療法士になったのは平成 4 年です。当時の作業療法士は全国で 5 千人にも満たないほどだったと思います。私は作業療法の専門のなかで精神障害領域に関心をもっていましたので、福岡県の私立精神科病院の作業療法士として働き始めました。その精神科病院で最初に行った仕事は、作業療法の開設という仕事でした。院内における治療環境の整備、病院で勤務する医療専門職や職員の方々に対するリハビリテーション教育、作業療法の医療認可施設として申請するための行政とのやりとりなど、社会人 1 年生の私が精神科病院での作業療法をよりよく定着させるために遠慮なく意見交換しあった 5 年間の思い出です。

作業療法が全国的に普及し始めた頃でしたので、対象者やその施設にふさわしい作業療法を提供できるよう創意工夫が求められていました。特に、治療や支援の手がかりを明確にして精神科リハビリテーションを進めることが要点になっていました。といいますのも、精神の働きはカタチとして捉えがたく、目に見えにくいことが特徴だからです。そのため、精神機能をわかりやすく現す評価手段を確立することを研究テーマとしました。この研究テーマをいまも

継続しており、紙と鉛筆や物差し、医療機関であれば備え付けの血圧計などの身近な道具を用いた精神機能評価法を目指す「ロウテク・リハビリテーション」として気長に取り組んでいます。身近な道具による精神機能測定は対象者自身のパフォーマンスや困難の程度を自覚させるのに役立ちますが、今後はハイテクによって客観的で再現性のある測定法になるよう工夫していかなければなりません。

創意工夫は研究だけでなく教育や広報にも必要であると思っています。作業療法は、しばしば難しい印象を与えがちのようですが、体験してみるととてもわかりやすいのです。作業療法とは、その人にとって目的や価値のある生活行為すべてを含む「作業」を用いた療法〈セラピー〉です。身体を動かす運動や暮らしに必要な動作だけでなく、社会に参加していくうえでの役割、さらに生活行為を支える気持ちやこころの基盤となる精神機能を現実に適応するような働きかけもおこないます。

そのように平易なやり方で人に優しく適応を促す作業療法の教育と広報を円滑に進めるために、作業療法学講座の取りまとめ役として務めてまいりたいと考えています。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



## 着任のご挨拶

看護科学コース 准教授 新福 洋子

2018年4月1日より、京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻家族看護学講座に准教授として着任しました新福洋子と申します。誌面をお借りして、皆様にご挨拶申し上げます。

私は2010年にイリノイ大学シカゴ校大学院看護学研究科博士課程を修了後、日本へ帰国し、博士研究員として聖路加国際大学（現）にて、アジア・アフリカ助産研究センターの設立に寄与しました。当センターではタンザニアのムンビリ健康科学大学と提携を組み、タンザニア国内初の助産学修士課程を立ち上げ、助産教育、労働環境、ケア改善のための助産リーダーの育成に着手し、その評価のための国際共同研究を開始しました。

2011年には世界保健機関東南アジア地域事務局（WHO SEARO）にてインターンとして職務を経験し、東南アジア地域の看護・助産人材に関わるデータ分析を行いました。フィールド調査では東ティモールとスリランカを訪れ、戦争の爪痕の残る地域における看護・助産人材育成システムの構築支援に関わりました。

2012年から聖路加国際大学ウィメンズヘルス・助産学研究室助教として母性看護・助産学の教育、タンザニアとの妊産婦・新生児ケア改善を目的とした国際共同研究を行いました。同大学はWHO コラボレーティングセンターの委嘱を受けており、WHO との新生児ケアプログラムのプロモーションやその評価研究にも携わりました。教育では学生に丁寧に向き合い、何が対象にとって一番重要なのかを共に考え、ケアおよび研究を行う姿勢を大切に参りました。

2017年から日本学術会議若手アカデミー会員として、2018年からは同副代表として、若手科学者の国際交流、研究環境改善、社会連携に力を注いでいます。同時に世界で200名の若手科学者が選ばれ所属するGlobal Young Academyのメンバーおよび執行役員にも選ばれました。看護・助産・研究において国内外の機関と連携をしながら、学生にも国際的な研究機会を提供し、多様な視点を活かした教育・研究活動に尽力して参りたいと考えております。皆様のご指導のほど、どうぞよろしくお願いいたします。





## 着任のご挨拶

看護科学コース 准教授 ANAGNOSTOU, Despina

I recently joined Kyoto University as an associate professor at the Graduate School of Medicine, division of Human Health Science with expertise in palliative care. With a first degree in Nursing and clinical experience in various settings in Athens, Greece, I moved to the UK in 2003, with the aim to expand my knowledge and experience in the field of cancer and palliative care. I completed an MSc in Advanced Nursing Practice from the University of Edinburgh, before obtaining my PhD from King's College London, where I looked at treatment and priority trajectories of patients with advanced cancer during their last months of life. I then worked as a researcher in the UK academia in the field of cancer, palliative and end-of-life care.

I am currently teaching four subjects within the international program of Kyoto University. *Introduction to Health Psychology* introduces concepts of integration of psychosocial and biomedical models of care and explores the impact of health psychology on the treatment of chronic illness. *Cultural Aspects of Health Care* explores the interplay between culture and health care and examines concepts of medical authority, treatment compliance, decision-making, and communication styles in different cultural contexts. *Palliative care within the European context* raises awareness of international approaches to palliative care and the European attitudes to current ethical challenges. *Critical appraisal of qualitative research* provides a critical understanding of a range of qualitative research methodologies and of their application in health care.

I have been awarded a grant from the KAKENHI scheme to look at Advanced Care Planning (ACP) practices and possibilities in the intensive care context. Comparisons between UK and Japan will enhance understanding of specific cultural aspects of decision making in end of life care and will enable the development of culturally appropriate clinical guidelines. I am also working closely with the European Society of Intensive Care, conducting a systematic review, which looks at the integration and effectiveness of palliative care interventions in the intensive care context, comparing practices between eastern and western countries.

My research interests include treatment decision-making, quality of life, patient preferences and priorities in palliative care, integration of palliative care within existing clinical services, measuring quality of care, support systems for families and patients, and transcultural aspects of end-of-life care.

I hope that with my role in Kyoto University I will inspire students to engage with international perspectives in health care. I also wish to further advocate for cross-cultural research between Japan and the West. I hope this research will inform international debates within the field of palliative care, but also enable Japan to identify its unique position in the global research world of palliative care.

## 着任のご挨拶

看護科学コース 准教授 宇都宮 明美

この度、京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻臨床看護学講座クリティカルケア看護学分野のダブルアポイントメント准教授として着任いたしました宇都宮明美と申します。どうぞよろしくお願いたします。

私は、国立循環器病センターの各ケアユニットで勤務、その後兵庫医科大学病院に異動し、教育担当師長、ICU 師長、看護部教育担当次長として、また 2005 年に急性・重症患者看護専門看護師に認定を受けて実践と教育に従事してま

いました。2011年に聖路加看護大学（現聖路加国際大学）に准教授として着任し、学部教育と専門看護師育成に携わってまいりました。この間も兵庫医科大学病院では心臓血管外科術前看護外来を開設して、周術期ケア実践も行ってまいりました。

専門看護師の役割は、実践（相談・調整・倫理調整）、教育、研究の役割があります。これはダブルアポイントメント教員としての役割と非常に近いものがあると考えています。京都大学医学部附属病院でのクリティカルケア看護の質向上（患者アウトカムを向上する）のために、専門看護師（服看護部長）としてスタッフの皆さんと一緒に悩み、ケア方略やシステムの改善をめざすこと。教員として、次年度に開設を予定しているクリティカルケア看護学高度実践看護師育成コースから、一人でも多くの優秀な高度実践看護師を輩出していくこと。そして、病院と大学の連携強化に努めていきたいと考えております。

今後とも臨床・教育・研究と努力してまいりますので、ご指導ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願ひ申し上げます。



## 着任のご挨拶

看護科学コース 准教授 松岡 真里

平成30年5月1日付けで、京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻家族看護学講座成育看護学分野の准教授として着任いたしました松岡真里と申します。本紙をお借りして、皆様に謹んでご挨拶申し上げます。

私は、千葉大学看護学部を卒業後、小児専門病院である千葉県こども病院に勤務いたしました。修士課程では、小児がんで骨髄移植をした子どもの治療選択への関わり方や移植後のQuality of Lifeの研究に携わり、博士課程では、小児がんで子どもを亡くした親に関する研究に取り組みました。小児看護の対象となる疾患や障がいを抱えながら成長発達する子ども、なかでも、小児がんや今の医療では命を助けることが難しい子どもとその家族へのケアに関心があり、博士修了後も臨床で実践を重ねて参りました。その後、高知大学で教育者・研究者の一步を踏み出しましたが、日本看護協会資格認定制度の小児看護専門看護師の認定を頂いており、実践的な取り組みは、教育・研究の場に身を置いても大切にしたいと考え取り組んで参りました。その点、京都大学は、医学部附属病院と人間健康科学系専攻との連携の中で、多くの教員が、教育とご自身の実践、そして研究活動に取り組んでおられます。研究者になることなど想定していなかった私が、実践と研究、教育の有機的なつながりを大切にしている京都大学にいられることは、貴重な機会であり、本当に感謝しております。また、私自身の関心領域である小児がんや成人の緩和ケアを専門に取り組んでおられる諸先生にも出会え、今後の研究の発展にもつながると感じております。

私たちの行う研究は、その成果が、対象となる子どもや家族、そしてケアに携わる看護師に還元されることが何より大切です。子どもや家族にケアが届くためには、単に研究を実施するだけでなく、研究成果に裏付けされたケアが提供できる実践力、また、臨床での疑問を解決する研究力、その両方が大切だと思っています。京都大学の恵まれた環境の中で、将来の小児看護学を实践、研究の側面で牽引できる人材を輩出できるよう、実践、研究、教育、社会貢献へと活動に邁進する所存でございます。精一杯、努力して参りますので、今後とも、ご指導ご鞭撻賜りますよう、よろしくお願ひいたします。

## 着任のご挨拶

検査技術科学コース 准教授 鎌田 真由美

平成 29 年 10 月 1 日付けで、大学院医学研究科 人間健康科学系専攻 医療検査展開学講座（ビッグデータ医科学）の准教授に着任いたしました。本紙をお借りして、ご挨拶を申し上げます。

私は、2010 年に奈良女子大学大学院の情報科学専攻を修了後、京都大学大学院情報学研究科 知能情報学専攻に進学し、本学化学研究所バイオインフォマティクスセンター阿久津教授のご指導のもと、タンパク質の分子機能とその動態メカニズムに対する計算科学的解析手法の開発に取り組んでまいりました。2013 年に博士（情報学）の学位を取得後、慶應義塾大学の理工学部に特任助教として着任し、微生物ゲノムの解読や、ヒト・マウスを対象とした癌ゲノム研究に携わらせていただくようになりました。それ以来、ゲノムを軸として、実際に機能を果たすタンパク質も含めた階層的な生体システムを包括的に解析したいと思うようになりました。そんな折、ご縁があり、2015 年に本学医学研究科 臨床システム腫瘍学講座に特定研究員として着任し、本学医学部附属病院での実臨床データや生体分子情報などを用いた、ゲノム医療・ゲノム創薬研究に取り組まさせていただきます。

ライフサイエンス領域でのビッグデータの利活用、そして医療現場や創薬への還元は世界的にも取り組むべき課題となっています。医学領域におけるデータサイエンスを世界的にリードする人材の育成を目指すビッグデータ科学分野で、研究と教育に邁進していく所存です。今後ともご指導ご鞭撻のほど、どうぞ宜しくお願い申し上げます。



## 就任のご挨拶

検査技術科学コース 准教授 中村 光宏

2017 年 10 月 1 日付で、人間健康科学系専攻 検査技術科学コース 医学物理学分野の准教授に就任いたしました。この場をお借りしまして、皆様にご挨拶申し上げます。

まず、あまり馴染みが無いと思われる「医学物理学」について簡単にご説明いたします。医学物理学とは、物理学の知識・成果を、特に放射線医学に応用・活用する学術分野を指します。X 線の発見とその医学利用に始まり、CT 装置や放射線治療装置などの開発、それらの高精度化を追求する研究は医学物理学によるものです。そして、医学物理学において研究面及び臨床面で活躍する者を医学物理士と言います。

私は大阪大学大学院 保健学専攻にて放射線治療に関する研究に携わる中で医学物理士の存在を知りました。医学物理士に関する情報を調べていたところ、本学放射線腫瘍学・画像応用治療学分野において医学物理士を養成していることを知り、進学を決めました。博士課程では、多職種が関与するオン・ザ・ジョブ・トレーニングを受け一方で、四次元放射線治療に関する研究に励みました。博士課程修了後は京都大学医学部附属病院 放射線治療科の医学物理士として、引き続き臨床と研究に携わって参りました。

今後はこれまでの医学物理学教育を更に推進させ、「病院で機能する医学物理士」、「臨床ニーズに応える医療機器を開発できる医学物理士」を養成しつつ、先進的医学物理学研究を展開していく所存です。今後とも皆様のご指導ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしく願い申し上げます。





## 新任のご挨拶

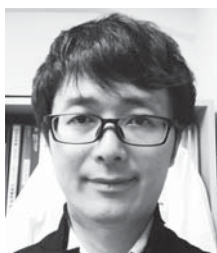
リハビリテーション科学コース 准教授 Todd PATAKY

I joined the Rehabilitation Science Course, Physical Therapy stream in April 2018 as an Associate Professor. I was previously an Associate Professor at the Institute for Fiber Engineering at Shinshu University in Ueda. I am originally from Toronto, Canada and I first came to Japan in 2004 as a JSPS postdoctoral researcher at ATR in Kansai Science City. I am very honored to join the strong team in Clinical Biomechanics at Kyoto University under the leadership of Professor Ichihashi, and I am thrilled to have started this exciting new chapter in my career.

My main academic interests include applied statistics and software development for the field of Biomechanics. Objectivity is of paramount importance to scientific progress, and I believe that powerful but easy-to-use statistical software tools can improve objectivity and expedite progress in Biomechanics in both academic and clinical settings, where the digital revolution continues and where researchers and clinicians face increasing amounts of digital data. I envision a future where we become increasingly reliant on software tools to objectively analyze these ever-growing datasets, and I feel that it is important to contribute to cross-field software infrastructure development today.

At Kyoto University my educational activities focus mainly on software, including physics simulation, 3D data visualization and applied statistics. Through ongoing international collaborations, especially in Australia, Canada, USA, UK and Belgium, I work with a number of clinicians in Physical Therapy, Gait Analysis, and Sports Injury Assessment, and I also regularly work with exercise scientists, computational biomechanists, mechanical engineers, computer programmers and statisticians, so I additionally hope to bring some of their expertise to Kyoto University students. Through these activities and others I hope to help internationalize Kyoto University students' academic experiences and perspectives.

I thank everyone in Human Health Sciences at Kyoto University for this opportunity, and I look forward to working with you all over the coming years.



## 就任のご挨拶

リハビリテーション科学コース 准教授 梁 楠

2018年4月1日付で、京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻作業療法学講座臨床認知神経科学に着任いたしましたので、本誌をお借りして皆様にご挨拶申し上げます。

私は2003年に広島大学医学部保健学科作業療法学専攻を卒業後、同大学院保健学研究科博士課程前期・後期を修了しました。在学時は中枢運動調節機構に興味を持ち、整形外科の教室（村上恒二教授）で指導を受けながら神経生理の教室（笠井達哉教授）に通い、ダブルアポイントメント学生として贅沢な研究生活を送りました。中枢神経系損傷の患者に対する効果的なリハビリテーション手法として運動イメージに注目し、その中枢メカニズムおよび効果的な臨床応用方法について経頭蓋磁気刺激法を主とした非侵襲的な電気生理学的手法を用いて実験を行いました。

2008年に博士課程を修了後、母校の生理学教室（松川寛二教授）で助教として10年間勤務しました。随意運動に伴う中枢性の運動・循環調節に関する研究を行い、「セントラルコマンド」の発現・調節機構についてヒトと実験

動物を対象に実験を行いました。初めて動物実験を見学した時、動物の動脈血圧を見て、ハートビートと神経活動を聞いて感動を覚えました。約20時間の実験を初めて経験し体力の限界も感じましたが、生体から発する信号を記録する、見る、聴くことに快感を覚えたのは否めません。

広島大学在職中、文部科学省の組織的な若手研究者等海外派遣プログラムで米国テキサス大学サウスウェスタンメディカルセンターに留学する機会をいただき、Dr. Jere Mitchell, Dr. Scott Smith, Dr. Masaki Mizuno の指導の下で高血圧の中枢メカニズムの解明について取り組みました。麻酔、気管挿管、動静脈カテーテル、交感神経活動記録、除脳、歩行誘発野の電気刺激、末梢神経電気刺激など、一つ一つの手技が成功しないと実験がうまくいかないという動物実験の難しさを痛感し、目標に向かってひたすら取り組みました。約半年間で100本以上の実験を行いました。そこで得られたのは動物実験の手術テクニックだけではなく、根気よく最後まで取り組み、そしてやり遂げたことによって自信が得られたことは研究者として一生の糧になると思います。

京都大学の教員に着任した後、作業療法士として京都大学医学部附属病院リハビリテーション部で診療に携わらせていただくことができ感謝しています。医療者としての自分をもう一度見つめなおすことができ、またより臨床に近い形で研究を行い、臨床問題を解決していくことを期待すると同時に、強い使命感と責任感を感じています。一方、京都大学でiPS細胞技術の開発と実用化が進んでいる中、再生医療におけるリハビリテーションの役割および重要性を示すことは重要な仕事であると認識しています。私にとって新しい分野でまだ勉強段階ですが、今後は再生医療のリハビリテーションに関連する臨床や研究に携われるように努力していく所存でございます。

京都大学という新天地で今後も研究・臨床・教育に尽力して参りたいと思いますので、皆様のご指導ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

## 着任のご挨拶

看護科学コース 助教 近藤 祥子

2018年4月1日付けで、人間健康科学系専攻看護科学コース家族看護学講座母性看護・助産学分野の助教に着任いたしました。この場を借りてご挨拶を申し上げます。

私は、京都大学農学部生物機能科学科を卒業後、奈良先端科学技術大学院大学に進学し、基礎生物学分野（分子発生生物学）で博士課程を修了いたしました。その後、博士研究員としてモデル生物を利用して生殖細胞発生や昆虫の変態期に關与する遺伝子の機能解析を行なっておりました。この間、自分自身が女性として生きていくことに対して様々な悩むことも多く、自分が生涯パッションを失わないでいられるテーマは何かと考え続けた結果、女性の生涯を支えることを目的とした学問領域として助産学があることに気づきました。そこで看護師・助産師免許を取得し、総合周産期センターで勤務しました。この過程で助産学領域はまだエビデンスが足りない、未解決の問題が山積みされている科学的ニッチにある状態を目の当たりにし、改めて研究を意識するようになりました。

この度、本学で働かせていただく機会を得、これまでの自分の経験を統合して働けることの喜びを感じております。臨床研究は基礎研究と異なる点も多く、戸惑うことも多いですが、分野を横断する視点を持って仕事ができるのは京都大学の大きな魅力と感じております。プレッシャーも大きく感じておりますが、本学で研究と教育に精一杯尽力していきたいと思っております。皆々様のご指導・ご鞭撻を賜りますよう、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

## 着任のご挨拶

看護科学コース 助教 須賀原 教子

この度、京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻臨床看護学講座精神看護学分野助教に着任いたしました、須賀原教子と申します。本誌をお借りして着任のご挨拶をさせていただきます。

私は、滋賀医科大学医学部看護学科を卒業後、看護師として京都大学医学部附属病院に就職いたしました。臨床経験を積む中で、身体疾患患者さんの精神的な支援に対する難しさを痛感し、精神看護専門看護師を目指し神戸市看護大学大学院博士前期課程へ進学いたしました。大学院では専門看護師が医療チームの協働をどのようにして促進しているのかということに興味をもち、研究に取り組みました。そして大学院を修了後、現在のダブルアポイントメント教員・看護師として着任させていただいております。研究者としては、入口に立ったばかりではありますが、天谷教授をはじめとした先生方のご指導を頂きながら取り組ませていただきたいと思います。また、臨床におきましては、自身の実践を磨き高度実践看護を提供できるよう努力していく所存でございます。教育と臨床をつなぐということを使命とし、精一杯努力いたしますので、今後とも、ご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

## 着任のご挨拶

看護科学コース 助教 山之内 智子

平成 29 年 12 月 1 日付けにて京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻看護科学コース精神看護学講座の助教に着任いたしました山之内智子と申します。本誌をお借りして着任のご挨拶をさせていただきます。

私が本学で最初にご指導頂きましたのは、平成 16 年に京都大学医療技術短期大学部専攻科助産学特別専攻に進学致しました時のことでした。臨床経験もまだなく、京都に住むことも初めてで緊張して 4 月を迎えましたが、本学の経験豊かな先生方が温かく迎えて下さったことを今も鮮明に思い出すことが出来ます。その後、総合病院に就職し、新卒で配属された部署は全く予想外の精神科でしたが、看護師である前に一人の人間として、どのように目の前の方と接するべきなのかと深く考えさせられる精神科は非常に興味深く、私が精神科に魅せられる切っ掛けとなりました。臨床経験を数年経た後に、修士課程は大阪大学大学院医学系研究科博士前期課程保健学専攻統合保健看護科学分野へ、博士課程は京都大学大学院医学研究科博士後期課程人間健康科学系専攻看護科学コースへ進学しました。研究に關しましての知識も経験も浅く未熟な学生で先生方へご迷惑をお掛けしながらも、本学にて廣島麻揚先生、天谷真奈美先生の温かく親身なご指導のもと、東日本大震災の被災者のメンタルヘルスについての論文にて博士号を取得することができました。1 つの分野を広く深く様々な角度から学んでいくことの困難さと面白さ、同じ分野を志す仲間と共に進む勉強やディスカッションの楽しさなど、今の自分の原点となる部分を京都大学で学ばせて頂きました。

助教として着任以後は、教育者の立場に立つことの責任の重さを日々感じながら、周囲の先生方の細やかなご指導・ご支援のもと一歩ずつ教員としての道を歩ませて頂いております。甚だ微力ではございますが、教育および研究へ一意専心致す所存でございますので、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう何卒よろしくお願い申し上げます。



## 着任のご挨拶

検査技術科学コース 助教 松尾 英将

平成 30 年 4 月 1 日付で、京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻の助教に着任しました松尾英将と申します。本誌をお借りして皆様にご挨拶申し上げます。

私は平成 23 年に京都大学医学部保健学科検査技術科学専攻を卒業し、人間健康科学系専攻の修士課程に進学しました。平成 25 年に修了後、京都大学医学部附属病院検査部で臨床検査技師として生理機能検査（心電図、運動負荷、脳波、神経伝導、誘発電位、呼吸機能、腹部超音波）および輸血検査（日当直）に 5 年間従事しました。平成 27 年には社会人として人間健康科学系専攻の博士後期課程に入学し、平成 30 年に 3 月に修了後、検査部より本学科に配



置換となりました。

学部の卒業研究では岡昌吾教授のもとで糖鎖生物学に関する研究を行いました。生化学的な実験手技や、研究の進め方の基礎をご指導いただき現在も大変役立っております。4回生の病院実習を機に、検査部や診療科と連携した臨床に近い研究に興味を持ち、修士課程以降は足立壯一教授、上久保靖彦准教授、伊藤洋志助教（現 長浜バイオ大学准教授）のご指導のもと、白血病の新規検査法や治療法開発、また好中球機能に関する研究を行っております。臨床検査の実務関連では、米国臨床検査技師の国際資格（ASCP<sup>®</sup>）を始めとする認定資格の取得や、自分が検査を担当した症例の case report 執筆などを行ってまいりました。

現在は検査技術科学コースの実習を中心に担当しており、また週2～3日の午前中は検査部にて腹部超音波検査に携わっております。今後は実務経験を生かして、藤井康友教授のご指導のもと関節リウマチ検査への超音波の応用に関する研究も開始予定です。臨床検査分野には臨床検査技師としての実務経験をバックグラウンドとした研究・教育者がまだまだ少ないと感じております。今後はそういった後進を育て、病院や大学、公的機関等で活躍できる人材の輩出に努めたいと思います。私自身、臨床検査技師としても研究・教育者としても未熟者ですが、本分野および人間健康科学科の発展に全力で取り組んで参る所存です。今後とも、何卒ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



## 着任のご挨拶

リハビリテーション科学コース 助教 谷口 匡史

平成30年4月1日付で、京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻助教に着任致しました谷口匡史と申します。本誌をお借りして、皆様にご挨拶を申し上げます。

私は、京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻理学療法学講座にて修士課程を修了後、滋賀医科大学附属病院に7年間、勤務しておりました。また、その傍ら本研究科にて博士課程を修了させて頂き、臨床や研究活動を通して多くの学びを経験させて頂いた期間でした。今年度で理学療法士になってから10年目を迎え、心機一転、教員として世界をリードする理学療法士やその研究者の育成に貢献できるよう精一杯頑張っていく所存です。

また、これまでに私は、変形性関節症や人工関節置換術後の機能回復に関する研究や加齢に伴う骨格筋変性についての研究を進めてきました。対象疾患となる変形性関節症やサルコペニアは、加齢に伴ってその有病率が増加しますが、運動介入により一定の予防・改善効果が期待できます。しかし、この分野において、まだ十分な科学的根拠に基づいた介入がなされているとはいえません。運動療法に関するスペシャリストとして、その予防・介入効果を最大限に引き出すことが理学療法士に求められていることだと思います。今後、この研究分野の発展に寄与できるよう精進していきたいと考えています。

最後になりましたが、今後とも皆様のご指導ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくようお願い申し上げます。

## 着任のご挨拶

看護科学コース 特定准教授 中津井 雅彦

平成29年8月1日付で、京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻臨床看護学講座（ビッグデータ医科学）の特定准教授に着任しました中津井雅彦と申します。本誌をお借りして、皆様に着任のご挨拶を申し上げます。

私は、平成20年に、九州大学大学院システム生命科学府システム生命科学専攻を修了後、産業技術総合研究所生

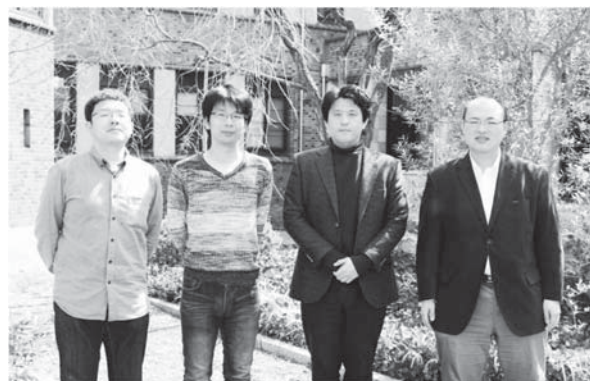
命情報工学研究センター、京都大学大学院薬学研究科、高機能遺伝子デザイン技術研究組合、神戸大学大学院工学研究科、理化学研究所（併任）にて、情動的・システム論的観点から生命現象の解析を行う手法の開発、およびその応用を実施してまいりました。また、平成 27 年より、京都大学大学院医学研究科 寄附講座 臨床システム腫瘍学講座へ着任し、電子カルテやコホートデータなどの医療データ解析に携わってまいりました。現職では、これまで培ってきた解析技術や経験を活かしつつ、臨床ゲノム情報統合データベースの整備をはじめとする医療分野の研究開発や人材の教育に尽力していく所存です。最後になりましたが、皆様のご指導ご鞭撻を何卒よろしくお願い申し上げます。

## 着任のご挨拶

検査技術科学コース 特定准教授 下野 昌宣

2017 年 12 月 1 日付で、人間健康科学系専攻 検査技術科学コースの特定准教授への拝命しました。この場を借りまして、ご挨拶を申し上げます。

私は京都大学の白眉プロジェクトでの兼任をさせて頂いております。本プロジェクトは学内の若手研究者らが研究分野の枠組みを超えたネットワークを創出する事を目指すものであり、K-Connex というプロジェクトとの連携を含む他コミュニティとの交流は本学外にも開かれております。奇遇にも、私どもの研究領域は、脳神経系の包括的なネットワーク構造を探求するコネクトームとよばれるものです。米国では、ヒトコネクトームプロジェクトという国家プロジェクトが、私が渡米した約半年後からスタートいたしました。その後、その中核拠点で充実した日々を過ごしはじめた頃から、早 10 年近い年月が過ぎました。そのプロジェクトの蓄積などから、マクロなスケールでの脳領域間をつなぐ白質繊維のネットワークのデータにおいては、精神疾患での新たなバイオマーカーを開発するなど“定量的な評価に基づく医療”を展開する上での重要な基盤として、次第に認識されるようになってまいりました。京都大学ひいては日本においてもその技術基盤の発展に資する事が肝要と考えます。また、神経系をミクロに見ますと、細胞が軸索と樹状突起を介してつながるネットワークを再び形成しております。そのスケールでのネットワークの研究の歴史は、ノーベル賞を受賞した Santiago Ramón y Cajal (1852-1934) に遡るとともに、近年の新たな見方と技術による再構築が著しく進んだ“古くも新しい”研究領域の萌芽期にあります。さらに、それらの異なるスケールの間を如何につないでいくのかが、サイエンスとして極めて重要な課題であり、かつ本質的に新しいチャレンジの場となりつつあり、多面的な先端科学の発展-再構築と人材育成の推進に尽力してまいりたいと考えております。今後とも、ご指導ご鞭撻のほど宜しくよろしくお願い申し上げます。



白眉の他先生方との写真（右から二番目が筆者）

## 着任のご挨拶

医療情報 AI システム学講座（産学共同） 特定准教授 玉田 嘉紀

平成 30 年 1 月 1 日付で、京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻医療情報 AI システム学講座の特定准教授に着任しました玉田嘉紀と申します。本誌をお借りして、皆様に着任のご挨拶を申し上げます。

私は、京都大学大学院情報学研究科にて学位を取得後、統計数理研究所、民間のスタートアップ企業、東京大学大学院情報理工学系研究科、東京大学医科学研究所ヒトゲノム解析センターを経て、1 月 1 日より新設されました本共同研究講座に着任いたしました。大学院生の頃より、計算機を用いていかに科学的な発見を支援するか、ということに興味を持っており、主にバイオインフォマティクス分野でのモデル生物のデータ解析、特に DNA 配列やタンパクのアミノ酸配列などの解析アルゴリズムの研究開発から研究の道に入り、現在は遺伝子間の発現制御のシステム（＝遺伝子ネットワーク）を統計科学的・情報科学的に予測・推定及び解析する研究を行っています。研究を進めるに従って次第にヒトのデータを扱うようになり、直前まではスーパーコンピュータを用いてガン遺伝子ネットワーク解析の研究開発を行うプロジェクトに所属しておりました。本研究講座ではこれまでの解析手法の知見を電子カルテや健康調査データなどの医療情報に広げることで、健康・医療により近い領域で研究を行っていきたいと考えております。最後になりましたが、皆様のご指導ご鞭撻を何卒よろしくお願い申し上げます。



## 着任のご挨拶

看護科学コース 特定助教 寺山 慧

2018 年 4 月 1 日付けで、京都大学大学院医学研究科人間健康科学系臨床看護学講座に特定助教として着任致しました寺山慧と申します。この場を借りて皆様にご挨拶申し上げます。

私は、京都大学総合人間学部認知情報学系を卒業後、同大学大学院人間・環境学研究科数理情報論分野の修士課程及び博士後期課程を修了しました。学部から修士課程においては計算機科学の基礎的な分野に取り組み、博士課程では魚の群れを対象にしながら動画画像処理（コンピュータ・ビジョン）の研究を行いました。学位取得後、東京大学大学院新領域創成科学研究科メディカル情報生命専攻にて特任研究員として着任し、強化学習やディープラーニングといった機械学習の手法を用いてインシリコ創薬に関する研究に取り組んできました。研究対象は様々に移り変わってきたものの、一貫して情報科学の視点から研究を行っております。

今年度より、理化学研究所革新知能統合研究センターとのクロスアポイント制度を利用して本学の教育・研究に携わることになりました。これまで取り組んできた機械学習と創薬の研究をさらに発展させ、シミュレーション・実験と機械学習の融合を進める一方、京都大学に蓄積されている多様な医療・診療データの解析を行い、微力ながら本学の教育・研究活動に貢献していく所存です。医療や看護に関しては全くの素人でまだまだわからないことばかりではございますが、今後ともご指導・ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。





## 着任のご挨拶

看護科学コース 特定助教 長島 俊輔

平成 30 年 4 月 1 日付で、京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻の特定助教に着任いたしました長島俊輔と申します。本誌をお借りして着任のご挨拶をさせていただきます。

私は、京都大学医学部保健学科看護学専攻を卒業後、京都大学医学部附属病院積貞棟 6 階（消化管外科・乳腺外科混合病棟）にて 3 年間看護師として勤務いたしました。その後、京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻の修士課程・博士後期課程に進学し、平成 29 年度の 3 月に修了いたしました。

修士課程・博士課程の 5 年間では生活環境看護学分野の若村智子教授のご指導の下、「生体リズムを看護に活かす」をテーマに、生体リズムの乱れが健康に及ぼす影響や、生体リズムのメカニズムを活用した看護師の交代制勤務への適応、生体リズムから見た最適な看護提供のタイミング、それを可能にするための体内時刻の同定などにとりくんでまいりました。生体リズムは、ヒトが、昼夜の存在する地球上に適応する上で最も大切なメカニズムであり、睡眠をはじめ日常生活のすべてに関わるシステムです。この生体リズムを研究テーマに、患者の健康および看護師の健康の双方からアプローチすることで、看護の質の向上に貢献できるよう今後も励んでまいりたいと思っております。

教育につきましては、教員としてだけではなく人間健康科学科（旧保健学科）の先輩としても、看護の魅力、研究の魅力、そして京大の魅力を伝えていきたいと思っております。是非とも学生との対話を大切に、学問的な発見や気づきを共有できるように関わってまいりたいと思っております。

まだまだ未熟ではございますが、母校での教育・研究に携われることに感謝しつつ、精一杯努めてまいります。今後とも、ご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



## 着任のご挨拶

リハビリテーション科学コース 特定助教 太田 恵

平成 30 年度より京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻予防理学療法学講座の特定助教に着任しました太田恵と申します。着任のご挨拶を申し上げます。京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻の修士課程を 1 期生として修了後、早稲田大学大学院スポーツ科学研究科の博士課程で体幹のバイオメカニクスや腰痛の治療方法に関する研究をしながら、理学療法士の養成に従事しておりました。縁があって京都大学にまた戻ってこられたことは大変光栄です。

私がこの度着任した「予防理学療法学講座」は、健康寿命の延伸をテーマに今年度新たに設置された産学共同講座です。今後さらに深刻化する高齢者の増加やそれに伴う社会保障費の増大を考えると、今まさに重要なテーマのひとつだと捉えています。我々は企業と協力し、従来にない設備やシステムを整えた運動施設で、科学的根拠のある評価・測定と運動プログラムを提供していこうとしています。現在、今秋頃に予定している運動施設の開設に向けて、企業も大学も準備を進めているところです。研究を現場に還元し、また現場で収穫したことを研究に発展できるようにしていきたいと考えています。

ぜひとも皆様のご指導いただきたく、宜しくお願い申し上げます。

## 着任のご挨拶

医療情報 AI システム学講座（産学共同） 特定助教 内野 詠一郎

平成 30 年 1 月 1 日付で、京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻医療情報 AI システム学講座の特定助教に着任しました内野詠一郎と申します。本誌をお借りして、皆様に着任のご挨拶を申し上げます。

私は京都大学医学部医学科を卒業後、本学医学部附属病院にて初期研修医および腎臓内科医員として臨床経験を積みました。その後、平成 28 年より本学医学研究科腎臓内科学の大学院生として研究を開始いたしました。腎臓内科学の柳田教授のもとより、臨床システム腫瘍学（当時）および人間健康科学系専攻臨床看護学講座ビッグデータ医科学の奥野教授のもとへの出向という形で、電子カルテデータによる、いわゆる AI 技術と呼ばれる機械学習技術等を用いた急性腎障害の発症や予測の研究などに主に取り組んできました。

電子カルテをはじめ多種多様な蓄積された医療データの活用、とくに昨今話題の AI 技術の活用によって、今後医療の大きな変革が期待されております。技術的な新規性はもちろん、臨床にも深く役立つ新たな研究を多く発信していきたいと思っております。また、今後は医療者にも AI など情報技術のより広い理解が必要になってくると思われ、本専攻での教育活動にも尽力してまいりたいと考えております。

最後になりましたが、今後とも皆様のご指導ご鞭撻を何卒よろしくお願い申し上げます。

## 第 30 回健康科学市民公開講座開催報告

学術委員会委員長 検査技術科学コース 教授 精山 明敏

平成 29 年 11 月 18 日（土）に第 30 回健康科学市民公開講座を開催いたしました。今回取り上げたテーマは「IT が医療を変えるー地域完結型医療の現在と未来」です。科学技術が身近なものになってきた現代、医療が大きく変わろうとしています。人工知能（AI）や情報技術（IT）が これからの地域医療をどのように変えていくのか、ビッグデータ医療や医療情報技術の現在と未来をテーマに、今後の社会・医療のあり方を考えることを目的として企画いたしました。

当日は雨で今シーズン一番の冷え込みにもかかわらず、107 名の方にご参加いただきました。医学研究科長上本伸二教授、人間健康科学系専攻長足立壯一教授の開会挨拶に引き続き、4 名の講師の先生にご講演いただきました。

第 1 講では、京都大学医学研究科人間健康科学系専攻（ビッグデータ医科学分野）の奥野 恭史教授から「人工知能・スーパーコンピュータが拓く医療の未来」と題してご講演いただきました。本講演では、奥野教授のグループが現在取り組まれている、京都大学医学部附属病院の実臨床データを用いた医療ビッグデータ解析・医療シミュレーションのほか、スーパーコンピュータを用いた創薬シミュレーション・ビッグデータ創薬の新たな方法論開発や今後の医療応用への展望についてお話しいただきました。



第 2 講では、立命館大学サステナビリティ学研究センター教授、京都大学医学研究科客員研究員であるとともに、スリランカ国総理大臣上席補佐官（科学技術担当）を兼務されているモンテ・カセム教授に「ビッグデータと医療：患者を中心軸にした情報融合がもたらす先端性ー脳卒中・脳梗塞の医療現場からの教訓」と題してご講演いただきました。情報を敏感に収集するセンサーの多様化やインターフェースの使いやすさによって大量にリアルタイム情報が我々の日常的判断を支えてくれるようになったビッグデータの時代に、患者を中心軸に置いた医療とはどのようなものか、また、医療現場がどのように対応すれば良いかについて、ロンドン大学キングスカレッジ病院で開発運用されてきた「TACMIS（トータルアクセス介護医療情報システム）」をもとにお話しいただきました。



第 3 講では、京都大学医学部附属病院・医療情報企画部長・病院長補佐、医学研究科・医療情報学分野および情報学研究科・医療情報学講座を兼務されている黒田知宏教授から「医療情報技術が拓く近未来の医療」と題してご講演いただきました。情報通信技術（ICT：Information and Communication Technology）の急速な発達にともなう医療現場の情報化への取り組みを、京都大学医学部附属病院におけるこれまでの取組事例や、今後の展望も含めて、特に、今話題の「モノのインターネット（IoT：Internet of Things）を使った、人に優しい情報サービスを提供するシステム（ユビキタス情報システム）への取組を中心に、未来の医療の姿についてお話しいただきました。

第 4 講では、滋賀県病院事業庁・庁長のほか滋賀県立成人病センター・特別顧問を兼務されている笹田昌孝京都大学名誉教授に「2025 年問題をクリアするー医療現場の IT 活用ー」と題してご講演いただきました。2025 年を 8 年後にひかえ、予測される多くの課題に対して有効な具体策をすみやかにスタートさせるために、IT が担う役割とその具体例について医療現場から提案いただきました。また、今回の市民公開講座のキーワードの「情報」は、施設・システム・人材いずれの構築にも不可欠であり、医療情報技術の活用は地域で生活する人々が、三世代が揃って日々健康的な生活を送ることを目標とするためにあることとお話しいただきました。

今回の健康科学市民公開講座のアンケート（回収率 84%）については、「大変よかった」53、「よかった」26、「ふつう」1、「良くなかった」1、「無回答」9 という集計結果でした。個別のコメントとしては「社会的価値創出に対す



る具体的な施策をわかりやすく説明頂けた」、「対症療法医療環境のAIによる革新だけでなく予防医療の知見も得られた」などの内容へのご意見の他、「今、大変注目されているテーマだから」、「過去のテーマ一覧を見、今年は格段に時代に即した画期的なテーマと思った」、「社会の中で注目され、話題として挙げられている」など今回のテーマについても大変好意的なご意見を多数いただきました。

次回以降の希望テーマについても沢山のご意見をいただきましたので次回へ引き継ぎたいと思います。



## 2017 年度オープンキャンパス

2017 年度オープンキャンパスは 2017 年 8 月 9 日（水）に前年度と同様、A 時間帯、B 時間帯の 2 回にわたって行われました（表 1）。全体説明会では、足立学科長の挨拶のあと、各コースの紹介が各コース担当教員からされました。その後、各専攻に分かれて、実習等の体験、研究室等の施設見学、学生個別相談が行われ、アンケート調査からも、いずれも好評でした。参加者は表 2 に示しますが、A 時間帯は女子 159 名、男子 57 名の計 216 名、B 時間帯は女子 161 名、男子 48 名の計 209 名が参加しました。専攻別では看護 109 名、理学 73 名、作業 10 名、総合 174 名でした。また、都道府県別では京都 51 名、大阪 51 名を始めとして東北や九州からも参加者がいました。2018 年度は 8 月 9 日（木）に行われる予定で、今後の京都大学医学部人間健康科学科に多くのやる気のある学生のリクルートのために、重要なイベントであると思われます。

表 1 オープンキャンパス 2017 スケジュール

A 時間帯（10：00～12：00）		B 時間帯（13：00～15：00）	
9:30	全体説明会受付開始 ※全体説明会会場：第 9 講義室	12:30	全体説明会受付開始 ※全体説明会会場：第 9 講義室
10:00	開会 学科長あいさつ	13:00	開会 学科長あいさつ
10:05	各コースの紹介 平成 30 年度以降の入学について	13:05	各コースの紹介 平成 30 年度以降の入学について
10:30	相談コーナー ・入試相談、学生受験相談 各コースの説明会、体験ブース ・先端看護科学コース ・先端リハビリテーション科学コース （理学療法学講座、作業療法学講座） ・総合医療科学コース	13:30	相談コーナー ・入試相談、学生受験相談 各コースの説明会、体験ブース ・先端看護科学コース ・先端リハビリテーション科学コース （理学療法学講座、作業療法学講座） ・総合医療科学コース
12:00	終了	15:00	終了

### ●参加者数

表 2 オープンキャンパス 2017 参加者状況

	参加者数		高 1		高 2		高 3		既卒生		その他	
	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子
A 時間帯	159	57	41	18	70	21	33	10	9	3	6	5
B 時間帯	161	48	71	21	65	22	20	2	2	2	3	1
計	320	105	112	39	135	43	53	12	11	5	9	6
	425		151		178		65		16		15	

・当日参加者（内数）：A 時間帯 16 名 / B 時間帯 15 名

### ●コース別人数

	看護		リハ（理学）		リハ（作業）		総合		未定	
	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子
A 時間帯	55	5	31	13	5	1	52	36	16	2
計	60		44		6		88		18	
	看護		リハ（理学）		リハ（作業）		総合		未定	
	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子
B 時間帯	47	2	16	13	3	1	62	24	33	8
計	49		29		4		86		41	

### ●都道府県別人数

都道府県名	A 時間帯	B 時間帯	計
北海道	12	2	14
青森	0	0	0
秋田	0	0	0
岩手	0	0	0
宮城	1	0	1
山形	0	0	0
福島	1	3	4
茨城	1	4	5
千葉	2	2	4
栃木	2	1	3
群馬	0	2	2
埼玉	3	1	4
東京	9	5	14
神奈川	2	6	8
山梨	1	3	4
新潟	1	0	1

都道府県名	A 時間帯	B 時間帯	計
長野	1	2	3
静岡	4	5	9
愛知	11	7	18
岐阜	3	2	5
三重	5	13	18
富山	0	0	0
石川	4	5	9
福井	8	20	28
滋賀	13	5	18
京都	31	20	51
大阪	31	20	51
兵庫	20	17	37
奈良	8	7	15
和歌山	4	3	7
徳島	1	5	6
香川	2	5	7

都道府県名	A 時間帯	B 時間帯	計
愛媛	0	12	12
高知	0	1	1
岡山	4	4	8
広島	17	5	22
鳥取	0	0	0
島根	1	0	1
山口	2	9	11
福岡	3	2	5
大分	0	3	3
佐賀	1	1	2
長崎	3	1	4
熊本	2	1	3
宮崎	1	3	4
鹿児島	1	2	3
沖縄	0	0	0
不明	0	0	0

### ●相談コーナー参加者数

- ・教員入試相談コーナー 29 名
- ・学生受験相談コーナー 23 名

## 人間健康科学系専攻から博士が 15 名誕生しました

### 博士授与者と論文題目

細川 陸也

論文題目：Marital Relationship, Parenting Practices, and Social Skills Development in Preschool Children  
(両親の関係性および養育態度と就学前児の社会的スキルの発達)

大塚 貞男

論文題目：Emotion perception mediates the predictive relationship between verbal ability and functional outcome in high-functioning adults with autism spectrum disorder  
(高機能自閉スペクトラム症成人において、感情認知は言語能力と機能的転帰との間の予測関係を媒介する)

山口 将希

論文題目：EFFECT OF LOW-INTENSITY PULSED ULTRASOUND AFTER MESENCHYMAL STROMAL CELL INJECTION TO TREAT OSTEOCHONDRAL DEFECTS: AN *IN VIVO* STUDY  
(ラット膝関節骨軟骨欠損モデルに対する間葉系間質細胞移植後の低出力超音波刺激が骨軟骨の再生へおよぼす影響について)

清水 彬礼

論文題目：Role of leptin in conditioned place preference to high-fat diet in leptin-deficient *ob/ob* mice.  
(レプチン欠損 *ob/ob* マウスの高脂肪食嗜好性におけるレプチンの意義)

山脇 理恵

論文題目：Remembering my friends: Medial prefrontal and hippocampal contributions to the self-reference effect on face memories in a social context  
(社会的文脈での顔記憶に対する自己参照効果の基盤となる内側前頭前野と海馬の役割)

亀田 直子

論文題目：Caregivers' lived experience in trying to read slight movements in a child with severe brain injury: A phenomenological study  
(重度脳損傷児の微細な反応の意味を読み解こうとするケア提供者の生きられた経験：現象学的研究)

長島 俊輔

論文題目：Bright-light exposure during daytime sleeping affects nocturnal melatonin secretion after simulated night work  
(模擬夜勤後の日中睡眠時の高照度光曝露は、その後の夜間のメラトニン分泌に影響を及ぼす)

阿部 浩

論文題目：Visualization of photoacoustic images in a limited-view measuring system using eigenvalues of a photoacoustic transmission matrix  
(Limited-view 下における光音響透過行列の固有値に基づく光音響イメージング)

松尾 英将

論文題目：Purification of leukemic blast cells from blood smears using laser microdissection.  
(レーザーマイクロダイセクションを用いた血液塗抹標本からの白血病細胞の純化)

谷口 匡史

論文題目：Increase in echo intensity and extracellular-to-intracellular water ratio is independently associated with muscle weakness in elderly women  
(エコー輝度および細胞外液比の増加は高齢女性の筋力低下に独立して関連する)



橋 口 優

論文題目：Merging and Fractionation of Muscle Synergy Indicate the Recovery Process in Patients with Hemiplegia: The First Study of Patients after Subacute Stroke.

(筋シナジーの混合と分離は脳卒中後片麻痺者の回復過程を示す：回復期脳卒中後片麻痺者を対象とした研究)

華 井 明 子

論文題目：Effects of Cryotherapy on Objective and Subjective Symptoms of Paclitaxel-Induced Neuropathy: Prospective Self-Controlled Trial

(化学療法に伴う末梢神経障害の主観的・客観的症状に対する冷却療法の予防効果の検討)

佐 伯 純 弥

論文題目：Muscle stiffness of posterior lower leg in runners with a history of medial tibial stress syndrome

(脛骨過労性骨膜炎既往ランナーの下腿後面における筋硬度)

白 石 直 樹

論文題目：Morphology and morphometry of the human embryonic brain: A three-dimensional analysis

(ヒト胚子期における脳の三次元形態計測学的解析)

塚 越 千 尋

論文題目：Neural activity in the prelimbic and infralimbic cortices of freely moving rats during social interaction: Effect of isolation rearing

(Social interaction 中のラット前辺縁皮質と下辺縁皮質のニューロン活動：その活動に対する隔離飼育の影響)



## 博士号を取得して

細川 陸也

平成 29 年度に博士号を取得しました看護科学コースの細川陸也と申します。私は、修士課程・博士課程と合わせて約 5 年間、本専攻で学ばせて頂きました。

私が大学院へ進学するきっかけとなったのは、大阪市西成区における保健師活動です。生活保護率が 2 割を超える西成区での保健師活動の中で、親世代から子世代への「貧困の連鎖」の現状を目の当たりにし、低所得世帯の児の学校不適応・社会不適応の背景を明らかにし貧困問題に働きかけたいと考えるようになりました。大学院では、修士課程・博士課程を通じて、生涯の社会適応に強く影響を及ぼすと考えられている幼少期・学童期における児の社会性の発達に関する研究を行いました。研究開始時は、研究フィールドの確保が困難であるなど、思うように研究が進まない時期もありましたが、指導教員をはじめとする周囲の方々のお陰で、ぶれることなく研究を継続することが出来ました。博士課程修了後の現在は、名古屋市立大学看護学部の助教として、継続して看護教育・研究に従事しています。今後は、教育・研究・社会活動等を通じて、社会に貢献していきたいと思えます。

最後になりましたが、修士課程・博士課程を通じて、本当にご丁寧なご指導いただきました、桂敏樹先生に心より感謝いたします。また、研究にご協力して下さった多くの参加者様・関係者の皆様、修士課程・博士課程を通じて応援して下さった先生方・先輩・同期・後輩・その他関わって下さったすべての皆様、心の支えとなってくれた両親に、この場を借りて深く感謝申し上げます。

## 博士号取得までとこれから

大塚 貞男



平成 29 年度に博士の学位を取得しました大塚貞男と申します。私は、平成 20 年 3 月に臨床心理士養成大学院を修了し、精神科病院で臨床心理士として働き始めました。その中で、アルツハイマー病や統合失調症の認知機能障害に興味を持ち、さらには、それらの疾患や知的障害を持たない場合でも、多くの患者さんの認知機能検査の成績に相当なバラつきがあることに関心を覚えました。それをきっかけとして、「発達障害」に関して素人同然だった私は、自分なりにその非定型的な特性について勉強し、そうした患者さんに ASD や ADHD の特性があるかどうか慎重に検討しながら、有

効な治療法が確立されていない状況で、個々の患者さんの認知機能の特徴に合わせた心理学的治療を試みていました。そこから本学大学院進学に至る経緯を、ここで一つひとつ説明する余裕はありませんが、認知機能を改善するアプローチの効果に期待し、統合失調症への認知リハビリテーションの訓練・研究をおこなった後、それを ASD 成人の治療に応用することを目指して、十一元三先生の指導の下で研究を進めていくことにしました。

博士後期課程では、まず治療標的とすべき認知領域を特定するために、ASD の非定型的特徴が認められる広範な認知機能を測定し、神経認知機能および社会認知機能と社会適応との関係性を検討することを研究課題としました。その結果、感情認知や言語能力によって ASD 成人の社会適応の個人差をある程度説明することができ、社会認知機能が神経認知機能と社会適応との予測関係を媒介していることが示されました。学位論文として提出したこの研究成果により、ASD 成人の社会認知機能を標的とした認知リハビリテーションを実践することの妥当性が確認され、現在は科研費の支援を得て、治療プログラムの開発および効果検証に関する研究を始めています。

本学大学院でご指導賜りました十一先生をはじめ、医学研究科の先生方、研究室のメンバー、研究参加者やこの研究に様々な示唆を与えて下さった皆様、そして、いつも支えてくれる家族のおかげで、こうして研究のスタートラインに立つことができました。本誌をお借りして、厚くお礼申し上げます。大学院修了後は、本学精神科で研究活動を続けられるという幸運に恵まれました。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしく願いいたします。

## 博士号を取得して

山口 将希

私は平成 29 年に博士号を取得することができました。京都大学の理学療法学専攻を卒業後、地元の病院に就職しましたが、その後、再び京都大学にて学ぶ機会を得て、同大学医学研究科人間健康科学系専攻の修士課程から博士後期課程へと進学いたしました。研究では主にラットを用いた物理刺激と関節軟骨の損傷・修復に関する研究を行い、いくつかの報告をまとめさせていただくことができました。研究生活でもっとも思い出に残ったのは、国際学会での口述発表を行えたことです。学会での議論やその前準備においても非常に多くの経験をすることができ、大変貴重な財産になったと感じております。

現在は国際医療福祉大学の理学療法学科教員として主に教育に携わっており、理学療法士の後進を育成するための慌ただしい日々を過ごしております。京都大学にて学ぶことができた経験を、研究領域のみではなく様々な形で還元していき、社会へと貢献していきたいと思っております。

最後になりましたが、学部時代から修士課程、博士課程でご指導いただきました黒木先生、縁あって多くのことを教えていただきました多くの先生方にこの場を借りて御礼申し上げたいと思っております。

## 博士号を取得して

山脇 理恵

平成30年1月に博士号（人間健康科学）を取得致しました、山脇理恵と申します。この度は、このような貴重な機会をいただけたことに心より感謝申し上げます。私は平成18年10月から現職である京都大学医学部附属病院に作業療法士と勤務し、平成23年4月に社会人大学院生として本大学大学院 作業療法学講座 臨床認知神経科学分野 十一元三教授の研究室に博士後期課程入学致しました。1年間の休学ののち研究指導委託制度を利用して、人間・環境学研究科 認知・行動科学講座 認知科学分野 月浦 崇教授の研究室に所属させていただきご指導を賜りました。大学院では、社会的文脈における自己参照効果の脳内機構について、健康若年成人を対象とした機能的磁気共鳴画像（fMRI）研究によって検証致しました。課程を通じて学ばせていただいた多くの経験を臨床でのリハビリテーションに役立てられるよう、これからも努力して参りたいと思っております。最後になりましたが、働きながら学問をする機会を与えて下さり、温かいご指導を賜りました十一元三教授、在学中から認定退学後もご指導、御高配賜りました月浦 崇教授、脳機能総合研究センターの先生方、研究室の皆さま、リハビリテーション部の先生方に心より厚く御礼申し上げます。

## 博士課程での日々を振り返って

亀田 直子

溺水後脳症の3歳児S君に絵本を読んだ時、彼の兎眼から溢れ出た涙が私の研究の原点です。私が探求した『重度脳損傷児の微細な反応を読み解こうとするケア提供者の経験』は、重度脳損傷児自身に確かめることができず、ケア提供者にとっても『不確かさ』を伴う経験であるため、一般化を目指せば零れ落ちてしまうような経験です。そこで現象学を理論的基盤としました。Spiegelberg（1982）によると、現象学の特徴はこれまで無視されてきた経験の側面を引き出すことによって、経験の世界を豊かにする決定的な試みを構成することにあります。

The 28<sup>th</sup> International Congress of Pediatrics では8か国以上の研究者と直接議論することができました。「救命後の重度脳損傷児のケア、本当に手探り状態で困っている。」「この研究のベースには日本の素晴らしいケアがある。それも世界に発信して欲しい。」などのエールと「帰国したらすぐに仲間とあなたの成果をシェアするよ！！」との嬉しい感想を頂きました。論文執筆は修正を重ねる日々でした。現象学的アプローチでは明らかにしようとする事象そのものが研究開始時には未だ分からないため、事象に応じて都度方法の修正が求められます。そのため自然科学の論文形式で、ケア提供者の感情を含む経験を英語でよりの確に記述することに苦戦しました。「臨床家は捉えている。でも論文化できずにいる。突破口をぜひ開いて欲しい。」と託されていましたので、世界に発信された時の胸の高鳴りは忘れられません。

暗闇に迷い込み、不安になることが幾度もありましたが、博士論文研究に取り組む仲間やゼミ修了生との交流、家族との日常が心の支えとなりました。鈴木真知子先生は「あきらめなかったあなたの勝利」「転んでも必ず何かを掴んで起き上がってくるから安心して待つことができました。」と評してくださいましたが、これは常にチャレンジする姿を見せ、根気強く待ち、必要な時には先を見据えた的確なアドバイスで導いてくださった鈴木先生によって授けられた研究者としての力なのだと思います。本当にありがとうございました。京都大学大学院での学際的な学びを糧に、意思表示が難しい状態にある患者様へのケア探求と研究方法開発を継続していきます。

最後になりましたが、研究参加者の皆様、ご指導・ご助言・励ましを頂きました諸先生方、実践家の皆様に心より感謝申し上げます。





## 博士課程の経験を通じて

阿部 浩

この度はこのような寄稿の機会を頂きましてありがとうございます。

5年前になりますが、私はメーカーの研究開発職として、京都大学と共同で装置の開発をするため京都に赴任いたしました。赴任先は大学の構内であり、本社の開発居室の閉鎖空間とは異なる自由な雰囲気に、「装置の立ち上げのための歯車になるべし」という1社会人の思いとは別に、「基礎理論に立ち返り原理を見つめなおして挑戦がしたい」という思いが芽生えていました。そこで、当時の会社の上司に相談をして、共同研究先であった椎名先生をご紹介頂きコース課程で進学の機会を頂きました。

博士課程の3年間、ではなく、帰任などの早まりもあったせいにして5年間になりましたが、日々会社での勤務終了後に実験室に行き、研究テーマの挑戦に勤しみました。研究テーマの挑戦は、つまり「楽しみと共に思考の無限ループ」の連続でした。本稿の題とした博士課程での経験とはこの「楽しみと思考の無限ループ」に他なりません。その行為を3年と数か月（2年分）続けることができたことをとても幸せに思います。研究テーマの結果は、まだまだ当初の構想の一部ではありましたが、論文にまとめて博士号を取得させて頂きました。しかし、それに加えて『考えれば答えは出る』という信念のような思いを自身に根を張らせたこともこの経験の大事な成果であったと思っています。

現在は、共同研究の成果と作り上げた想いを製品化につなげる仕事に尽力しております。これからも挑戦と研鑽と忘れずに日々を過ごしていきたいと思っております。

最後になりましたが、ゼミでご指導頂きました椎名先生、山川先生、近藤先生、浪田先生、秘書さん各位、学生さん各位、その他お世話になった多くの方にこの場を借りて御礼申し上げます。

## 博士号取得までを振り返って

橋口 優

私は大学卒業後、脳性麻痺などの中枢神経疾患を有する子ども達の病態像やリハビリテーションの効果を明らかにしたいと思い、2013年に京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻に進学しました。指導教員や先輩方から多くのご助言やご指導を頂いた結果、2018年3月に博士号（人間健康科学）を取得することが出来ました。

博士号取得までを振り返って、最も良かったと感じることは、主となる研究活動とともに臨床活動を行えたことでした。修士課程進学後、私は京都大学医学部附属病院及び京都市内の総合支援学校にて臨床活動を行う機会を頂き、臨床場面で生じる多くの問題を間近で感じる中で、自らの研究の有用性や研究成果の還元方法を考えることの重要性を感じました。さらに、総合支援学校では実際の測定結果を学校の教員や保護者の方々に説明する中で、子ども達の成長や日々の支援の効果について共有する経験が出来、研究成果を臨床場面に還元することの難しさと重要性を感じることができました。

大学院を卒業後、研究活動と臨床場面、そして地域をつなぐ存在となるため、現在は群馬県という新しい環境で、大学教員として研究に従事しています。学生への指導を行うとともに、地域の総合支援学校や保健センターなどでの相談や発達支援に取り込む中で、子ども達や周囲の人々の抱える困難さとそれに対する支援の方法を明らかにすることを目的に、研究活動に取り組んでいます。

最後になりましたが、7年間に渡り御指導を賜りました京都大学大学院医学研究科の大畑光司先生や山田重人先生、研究室の先輩方、後輩の皆様には心より御礼申し上げます。



## 大学院生活を振り返って

華井 明子

私は、がん治療期の副作用を軽減する非薬物療法について研究を行い2018年3月に博士（人間健康科学）の学位を取得いたしました。本学医学部保健学科2期生として卒業後、回復期リハビリテーション、特殊疾患療養病棟で看取りの時期の作業療法に携った後、緩和ケア病棟の立ち上げの経験から、リハビリテーションを始めとする現行の緩和・支持療法のエビデンス創出の必要性を痛感し、2012年に大学院生として戻ってまいりました。臨床から基礎へ、基礎から臨床へ研究を繋げることを夢見て、学部の脳科学研究でお世話になった研究室へ入学したものの、両者が研究方法論から全く異なる領域であり、自身の甘い見積もりに愕然としたことを覚えております。その際、臨床で染みつけたスピード感や思考パターンを鑑み臨床研究への舵切をアドバイスくださった三谷章教授にはとても感謝しております。さらに病院の先生方との連携をご支援くださりご指導くださった坪山直生教授、Socializationの大切さをご教授くださり研究視野を広げてくださった荒井秀典教授、大量の研究疑問を持って押し掛けた私に一から丁寧に指導くださった石黒洋教授、突然の統計相談から論文執筆までお世話になった寒水孝司准教授をはじめ、ここには書ききれないほどのたくさんの先生方のお世話になりました。この場をお借りして感謝申し上げます。乳がん化学療法中の便秘予防の非薬物介入、化学療法起因性末梢神経障害予防介入の臨床試験を行い、世界のUnmet needに立ち向かう研究の手ごたえを感じることができました。

現在は特任研究員として日本がん支持療法研究グループの事務局を行っております。熱意のある研究者の研究相談をお待ちしております。



## 博士後期課程を振り返って

佐伯 純弥

2018年3月に博士後期課程を修了致しました佐伯純弥と申します。この度は、貴重な機会をいただき、感謝申し上げます。

私は博士後期課程入学後、下腿のオーバユース障害の研究を進めてまいりました。入学当初は研究の方向性が定まらず苦悩の日々が続きましたが、早期から筋生理学の実験や高齢者を対象とした大規模研究等、多くの経験をさせていただいたことが研究に対する視野を養うことに繋がったと思っております。また、様々なバックグラウンドと豊富な臨床経験を持つ先生方や、優秀な先輩、後輩とともに日々議論できたことで、研究者として大きく成長することができました。

私は2018年4月から、早稲田大学スポーツ科学学術院において、日本学術振興会特別研究員PDとして従事させていただいております。研究環境が変わりましたが、新しい研究室では京都大学で幅広く研究に従事させていただいた経験を活かし、自分にしかできない研究に取り組んでいきたいと思っております。

最後になりましたが、3年間手厚い御指導を頂いた市橋則明教授、池添冬芽准教授、建内宏重特定准教授、実験等を通して多くの意見を交換させていただいた研究室の皆様、この場をお借りしまして心より御礼申し上げます。

## 多くの人に支えられた博士論文取得

白石 直樹



「2012年 エディンバラにて」

平成30年度に博士号を取得しました。私は平成25年3月に京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻修士課程を卒業した後、近畿大学医学部附属病院にて病理検査技師として従事しながら、京都大学医学研究科研究協力員として修士課程の間に行った研究を継続してきました。

臨床での仕事とは全く異なるヒト胚子期の脳発生を研究している、京都大学とは遠い場所に住んでいるという事もあり、時間的に大変な事もありましたが、周りの皆さまに支えられ、無事に論文をまとめ論文博士を取得することができました。

博士号の取得は修士を卒業した時からの漠然とした目標でした。それが現実となり、正直未だ実感がないですが、取得は研究者と

してスタートラインに立っただけと考えています。これから臨床にも研究にも貢献できる臨床検査技師になるように、日々過ごしていければと考えています。

最後になりましたが、長年に渡りご指導賜りました高桑徹也教授、お世話になりました研究室の皆さま、社会人になっても研究を続けることを許し支えてくれた妻、友里恵と息子、理一郎に心より御礼申し上げます。

## 博士号を取得して

塚越 千尋



私は本学大学院人間健康科学系専攻が開設された2007年に第1期生として入学し、博士課程を修了するまで10年間大学院に在籍しました。単位取得満期退学後は研究生・研究員として籍を置き、2017年に『Neural activity in the prelimbic and infralimbic cortices of freely moving rats during social interaction: Effect of isolation rearing (social interaction中のラット前辺縁皮質と下辺縁皮質のニューロン活動：その活動に対する隔離飼育の影響)』という題名で博士論文が受理されました。

人の脳機能について興味をもち大学院に進んだものの、神経生理学的な研究疑問に電気生理学的方法で挑まんとする所属した研究室で、知識も技術も丸腰同然であった私は、恥ずかしながらまことに“できない”学生であったと思います。まったく芽の出ない

いま年月だけが過ぎていく先行き不明の暗闇を、本人が半ばあきらめの心持ちになりかけているにもかかわらず粘り強く指導をしてくださった先生方と、苦楽をともにした同僚・後輩の存在と、飽きずに励ましてくれた家族と、週2回の臨床でお会いする患者さんとのやりとりのおかげで、くぐり抜けることができました。その感謝の思いと安堵の気持ちからか、公聴会が終わった後、自宅へ帰る電車の中で涙が止まりませんでした。ともかく、“手早く答えを見つけて競争に勝つことだけが研究ではない”と三谷先生、松林先生お二人の研究・指導に真摯に取り組む姿勢を間近で拝見できたこと、周囲の人に恵まれたことが10年間の院生時代の私なりの fruition となりました。

現在は、藍野大学医療保健学部で作業療法学科の教員をしながら、この大学にある中央研究施設で、脊髄損傷モデルラットに対するヒト骨髄由来幹細胞移植による再生医療の基礎研究に関らせていただいております。教育と研究



の両立は難しく、相変わらずかけずりまわっている日々ですが、今後も院生時代に受けた恩を忘れずに、学生の指導や研究に邁進していきたいと思えます。

**人間健康科学系専攻・人間健康科学科  
平成 30 年度入学試験結果 及び 平成 29 年度修了・卒業者数**

**平成 30 年度 医学部人間健康科学科入学試験結果**

コース・日程		募集人員	志願者数	合格者数	入学者数
先端看護科学コース	特色	20	59	20	20
先端リハビリテーション科学コース (理学療法学講座)	特色	5	8	4	4
先端リハビリテーション科学コース (作業療法学講座)	特色	5	7	3	3
一 括	一般	73	228	81	81
合 計		93	287	101	101

**平成 30 年度 医学研究科人間健康科学系専攻（修士課程）  
入学試験結果**

コース	募集人員	志願者数	合格者数	入学者数
看護科学コース { 専門看護師課程（内数）} 【高度実践助産学系（内数）】	28  【10】	31[3] {2[1]} 【17[0]】	20[2] {2[1]} 【10[0]】	19[1] {2[1]} 【10[0]】
検査技術科学コース	13	29[0]	26[0]	24[0]
リハビリテーション科学コース (理学療法学講座)	4	16[0]	10[0]	9[0]
リハビリテーション科学コース (作業療法学講座)	4	13[2]	10[2]	8[2]
合 計	49	89[5]	66[4]	60[3]

[ ]の数は、社会人特別選抜（内数）

**平成 30 年度 医学研究科人間健康科学系専攻（博士後期課程）  
入学試験結果**

コース	募集人員	志願者数	合格者数	入学者数
看護科学コース	15	12	8	8
検査技術科学コース		8	8	8
リハビリテーション科学コース (理学療法学講座)		7	4	4
リハビリテーション科学コース (作業療法学講座)		3	3	3
合 計	15	30	23	23

## 平成 29 年度 医学部人間健康科学科卒業生数

専攻	卒業生数
看護学専攻	74
検査技術科学専攻	35
理学療法学専攻	20
作業療法学専攻	17
合計	146

## 平成 29 年度 医学研究科人間健康科学系専攻（修士課程）修了者数

コース	修了者数
看護科学コース 【高度実践助産学系（内数）】	18 【10】
検査技術科学コース	20
リハビリテーション科学コース （理学療法学講座）	15
リハビリテーション科学コース （作業療法学講座）	5
合計	58

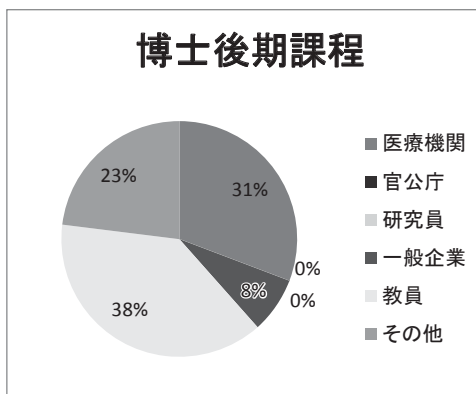
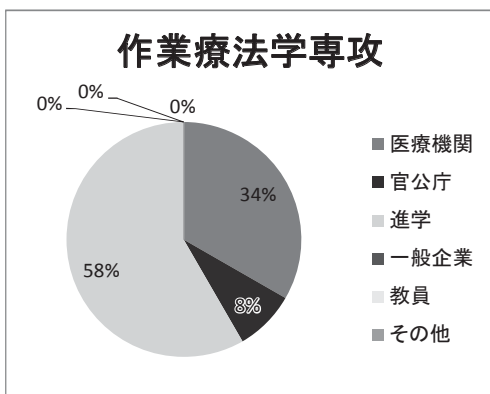
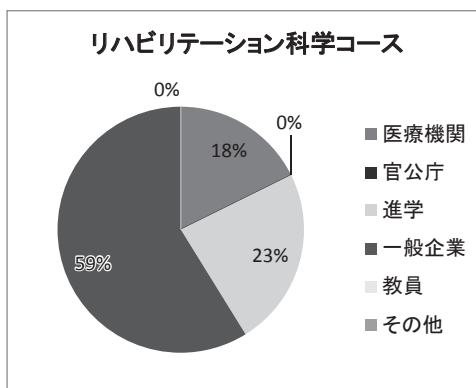
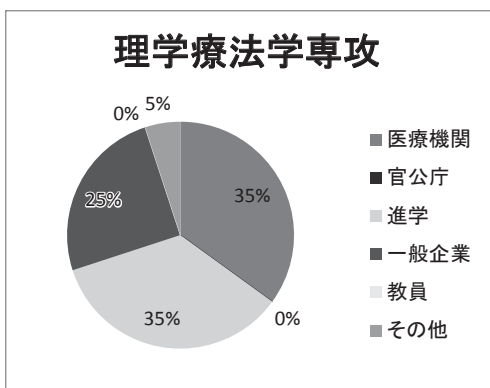
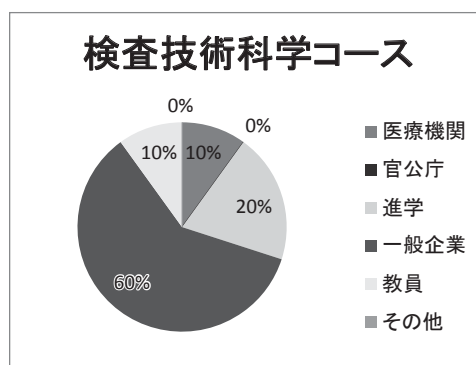
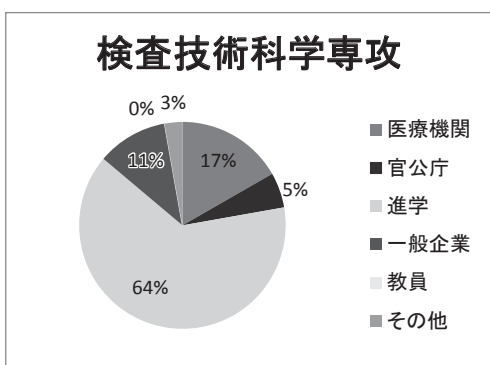
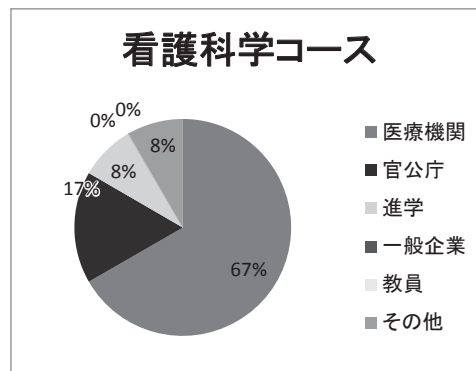
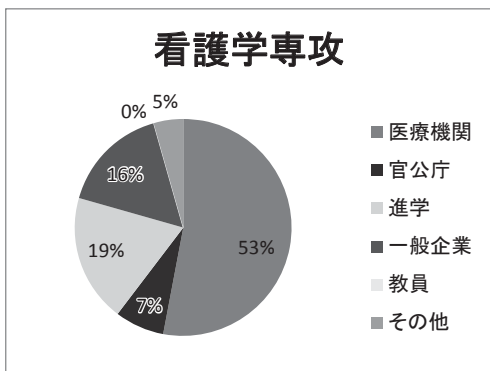
## 平成 29 年度 医学研究科人間健康科学系専攻（博士後期課程）修了者数

コース	修了者数
看護科学コース	2
検査技術科学コース	2
リハビリテーション科学コース （理学療法学講座）	3
リハビリテーション科学コース （作業療法学講座）	0
合計	7

平成29年度(平成30年3月) 卒業・修了生の進路調査結果

■学部

■大学院(修士)





## 人 事 異 動

発令年月日	職 名	氏 名	所 属	異 動 事 由
平成				
29.8.1	特定准教授	中津井 雅彦	看護科学コース	採用
29.8.31	助教	小西 奈美	看護科学コース	辞職
29.9.30	特定准教授	佐藤 弥	発達障害支援医学講座 (寄附)	任期満了
29.10.1	准教授	鎌田 真由美	検査技術科学コース	昇任 (特定研究員より)
29.10.1	准教授	中村 光宏	検査技術科学コース	採用
29.10.1	教授	稲富 宏之	リハビリテーション科学コース	採用
29.10.31	助教	山口 琴美	看護科学コース	辞職
29.12.1	助教	山之内 智子	看護科学コース	採用
29.12.1	特定准教授	下野 昌宣	検査技術科学コース	採用
30.1.1	特定准教授	玉田 嘉紀	医療情報 AI システム学 講座 (産学共同)	採用
30.1.1	特定助教	内野 詠一郎	医療情報 AI システム学 講座 (産学共同)	採用
30.3.31	教授	坪山 直生	リハビリテーション科学コース	辞職 (早期退職)
30.3.31	教授	鈴木 真知子	看護科学コース	定年退職
30.3.31	教授	菅沼 信彦	看護科学コース	定年退職
30.3.31	教授	二木 淑子	リハビリテーション科学コース	定年退職
30.3.31	助教	松島 佳苗	リハビリテーション科学コース	任期満了
30.4.1	准教授	新福 洋子	看護科学コース	採用
30.4.1	准教授	PATAKY,Todd Colin	リハビリテーション科学コース	採用
30.4.1	准教授	ANAGNOSTOU,Despoina	看護科学コース	採用
30.4.1	准教授	宇都宮 明美	看護科学コース	採用
30.4.1	助教	近藤 祥子	看護科学コース	採用
30.4.1	助教	谷口 匡史	リハビリテーション科学コース	採用
30.4.1	助教	須賀原 教子	看護科学コース	採用
30.4.1	助教	松尾 英将	検査技術科学コース	採用
30.4.1	准教授	梁 楠	リハビリテーション科学コース	採用
30.4.1	特定助教	太田 恵	予防理学療法学講座 (産学共同)	採用
30.4.1	特定助教	池之上 辰義	検査技術科学コース	採用
30.4.1	特定助教	長島 俊輔	看護科学コース	採用
30.4.1	特定助教	寺山 慧	看護科学コース	採用
30.5.1	准教授	松岡 真里	看護科学コース	採用

## 日 誌 (H 29.4 ~ H 30.3)

4.5	修士課程 1 回生ガイダンス	8.25	3 年次編入学試験
4.6	博士後期課程 1 回生ガイダンス 教務・教育委員会 病院協議会	8.29	大学院修士課程入学試験
4.7	学部入学式 学部新入生ガイダンス 大学院入学式	9.7	病院協議会 教務教育委員会
4.13	執行部会議 医学研究科会議・医学教授会	9.8	全学教育シンポジウム
4.17	拡大執行部会議	9.14	執行部会議 臨時教授会 医学研究科将来計画検討委員会 医学研究科会議・医学教授会
4.20	教員会議 教授会・学系会議	9.15	3 年次編入学試験合格発表 大学院修士課程入学試験合格発表
4.27	執行部会議 医学研究科関係学系長会議・専攻長会議	9.19	拡大執行部会議
5.9	病院協議会	9.21	教員会議 教授会・学系会議
5.10	教務・教育委員会	9.22	遺骨返還式
5.11	執行部会議 医学研究科将来計画検討委員会 医学研究科会議・医学教授会	9.28	執行部会議 医学研究科関係学系長会議・専攻長会議
5.13	大学院説明会 [検査技術科学コース]	10.5	病院協議会 教務・教育委員会
5.15	拡大執行部会議 第 54 回国立大学臨床検査技師教育協議会	10.12	執行部会議 医学研究科将来計画検討委員会 医学研究科会議・医学教授会
5.18	LIMS 教授会 教員会議 教授会・学系会議	10.16	拡大執行部会議
5.20	大学院説明会 [リハビリテーション科学コース (作業)]	10.19	LIMS 教授会 教員会議 教授会・学系会議
5.25	執行部会議 医学研究科関係学系長会議・専攻長会議	10.20	解剖体祭
5.27	大学院説明会 [看護科学コース] 大学院説明会 [リハビリテーション科学コース (理学)]	10.26	執行部会議 医系懇談会 医学研究科関係学系長会議・専攻長会議
6.1	病院協議会 教務・教育委員会	10.27	五〇会 (秋の会)
6.4	第 10 回国立大学保健医療学系代表者会議 看護学分会	11.1	大学院博士後期課程入学試験
6.5	第 12 回国立大学保健医療学系代表者協議会	11.2	病院協議会
6.8	執行部会議 医学研究科将来計画検討委員会 医学研究科会議・医学教授会	11.3	京都大学ホームカミングデイ
6.12	拡大執行部会議	11.7	執行部会議
6.15	教員会議 教授会・学系会議	11.8	教務・教育委員会
6.18	創立記念日	11.9	医学研究科将来計画検討委員会 医学研究科会議・医学教授会
6.22	執行部会議 医学研究科関係学系長会議・専攻長会議	11.11-12	特色入試第 2 次選考
7.6	病院協議会 教務・教育委員会	11.13	拡大執行部会議
7.7	平成 29 年度全国国立大学法人助産師教育専任教員会議	11.16	教員会議 教授会・学系会議
7.13	執行部会議 医学研究科将来計画検討委員会 医学研究科会議・医学教授会	11.18	第 30 回健康科学市民公開講座
7.18	拡大執行部会議	11.22	執行部会議
7.20	教員会議 教授会・学系会議	11.23	11 月祭 (~ 26 日)
7.24	医系懇談会	11.24	医学研究科関係学系長会議・専攻長会議 医学研究科会議
7.27	執行部会議 医学研究科関係学系長会議・専攻長会議	11.27	博士後期課程入試合格発表
8.3	病院協議会	12.7	病院協議会 教務・教育委員会
8.9	オープンキャンパス	12.14	執行部会議 医学研究科将来計画検討委員会 医学研究科会議・医学教授会
		12.18	拡大執行部会議
		12.21	教員会議 教授会・学系会議
		12.23	KUROME
		12.25	医学研究科関係学系長会議・専攻長会議
		12.28	執行部会議 医学部教授会

## 日 誌

30.1.4	新年挨拶会 教務・教育委員会	3.1	病院協議会 教務・教育委員会
1.9	病院協議会	3.8	執行部会議 医学研究科関係学系長会議・専攻長会議
1.11	執行部会議 医学研究科将来計画検討委員会 医学研究科会議・医学教授会	3.9	教授会 医学部教授会
1.13	大学入試センター試験（～14日）	3.10	学部入試合格発表 2年次学士入学試験合格発表
1.15	拡大執行部会議	3.12	拡大執行部会議
1.18	教員会議 教授会・学系会議	3.15	教員会議 教授会・学系会議
1.25	執行部会議 医学研究科関係学系長会議・専攻長会議 医学研究科会議・医学教授会	3.22	執行部会議 医学研究科関係学系長会議・専攻長会議 医学研究科将来計画検討委員会 医学教授会
2.1	病院協議会 教務・教育委員会	3.26	修士・博士学位授与式 修了を祝う会
2.2	高度医療専門職大学院シンポジウム	3.27	学部卒業式 卒業を祝う会
2.7	特色入試最終合格発表		
2.8	執行部会議 医学研究科将来計画検討委員会 医学研究科会議・医学教授会		
2.13	拡大執行部会議		
2.15	教員会議 教授会・学系会議		
2.16	2年次学士入学試験		
2.19	五〇会総会		
2.22	執行部会議 医学研究科関係学系長会議・専攻長会議 医学研究科将来計画検討委員会 医学研究科会議・医学教授会		
2.25	学部入試（～26日）		

## あとがき

本年も無事に広報をお届けする事ができました。本誌では、本学科を取り巻く組織改革や人事異動を皆様に正確にお伝えするとともに、学位取得者の声や開催行事などもご紹介したいと思っております。特に近年は、学士編入制度を新しく導入した事に加え、「新医療人の育成」シンポジウムやオープンキャンパスといった、本学科の授業や研究を周知するためのプロモーション活動を積極的に行っております。今後ともお力添えの程、どうぞよろしくお願い致します。

（広報委員会 委員長 奥野 恭史）

<http://www.med.kyoto-u.ac.jp/>

